

スポーツ指導者海外研修事業

令和2年度帰国者報告書



公益財団法人 日本オリンピック委員会
JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE



スポーツ指導者海外研修事業
令和2年度帰国者報告書目次

平成30年度長期派遣（2年）

須藤 啓太（サッカー）	3
河野 恭介（スキー／アルペン）	19
小原 英志（スケート／スピードスケート）	31

○平成30年度 長期派遣（2年）3名

競技団体	(フリガナ) 氏名	研修項目	研修先	研修時期
1 サッカー	スドウ 啓太 須藤 啓太	スペインプロクラブの育成カテゴリーにおけるトレーニング、リーグ戦、タレントの発掘を学ぶ。	スペイン (バスク)	平成30年7月9日～ 令和2年6月9日
2 スキー (アルペン)	コウノ 恭介 河野 恭介	アルペンスキー強豪国オーストリアにおけるスキー連盟の強化体制、方法の視察。またオーストリア国内の指導者資格取得とそのため語学習得。	オーストリア (インスブルック)	平成30年7月10日～ 令和2年12月27日
3 スケート (スピードスケート)	コハラ 英志 小原 英志	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得 ・カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査 ・カナダにおけるコーチ養成システムの調査 	カナダ (カルガリー)	平成30年8月10日～ 令和2年8月9日

研修員報告 〈サッカー 須藤 啓太〉



平成30年度・長期派遣（サッカー）



I. 研修題目

スペインのプロクラブにおける、育成カテゴリーのトレーニング、リーグ戦、タレントの発掘を学ぶ。

II. 研修期間

2018年7月9日～2020年6月9日

III. 研修地及び日程

(1) 主な研修先

Athletic Club
SANTUTXU F.C.

(2) 受入関係者

José María Amorrortu (Athletic Club)
Lander Hernández Simal (Athletic Club)
Fernando Quintanilla Barañano (Federación Vasca de Fútbol)
Miguel Ángel Gómez (SANTUTXU F.C.)
Asier York (SANTUTXU F.C.)

(3) 研修日程

通常研修：Athletic Club

日程 2018年7月9日～2020年6月9日

内容 U10、U11、U12チームのトレーニングとリーグ戦の視察

特別研修1：SD EIBAR

日程 2019年1月22日～2019年1月27日

内容 SD EIBAR トップチームのトレーニング見学

特別研修2：スペインサッカーコーチングスクール

日程 2019年5月26日～2019年7月5日

内容 スペインサッカーコーチングスクールレベル1を受講

特別研修3：SANTUTXU F.C.

日程 2019年8月1日～2020年5月31日

内容 U15チームのコーチングスタッフとして活動

IV. 研修概要

(1) 研修題目の細目

- ①スペインサッカーについて
- ②Athletic Clubについて
- ③U10、U11、U12のトレーニング
- ④タレントの発掘
- ⑤特別研修3について

(2) 研修方法

Athletic ClubのU10、U11、U12のトレーニング及びリーグ戦に帯同し、Athletic Clubの育成方法論を学ぶ。またAthletic Clubがどのようにして新たな才能ある選手を発見し、獲得するのかを知る。

(3) 研修報告

①スペインサッカーについて

スペインは南ヨーロッパのイベリア半島に位置し、人口約4,700万人、17の自治州から構成され、首都はマドリードに置かれている。国内で最も人気のあるスポーツはサッカーである。1929年に創設されたスペインプロサッカーリーグ「リーガ・エスパニョーラ」は、ヨーロッパサッカー五大リーグ（イングランド、イタリア、ドイツ、フランス）の一つに数えられており、FC Barcelonaのリオネル・メッシ選手（アルゼンチン代表）やReal Madridのルカ・モドリッチ選手（クロアチア代表）といった世界各国のスター選手が多数プレーしている。また、近年では日本人選手の活躍も目立ち、RCD Mallorcaの久保建英選手やSD EIBARの乾貴士選手などがプレーしている。代表チームに目を移すと、正確なテクニックと豊富な運動量を活かしてゲームを支配するポゼッションサッカーのスタイルを確立し、UEFAヨーロッパ選手権2008優勝、2010FIFAワールドカップ優勝、UEFAヨーロッパ選手権2012優勝と大きな成功を収めている。現在Jリーグのヴィッセル神戸で活躍するアンドレス・イニエスタ選手も、上記の大会の優勝メンバーの一人である。

②Athletic Clubについて

Athletic Clubはスペインの北、バスク州ビスカヤ県ビルバオに本拠地を置くサッカークラブである。1898年にクラブ創設。1929年にリーガ・エスパニョーラが創設されて以降、一度も2部リーグに降格したことがない。これはAthletic Club、FC Barcelona、Real Madridの3クラブのみである。これまでにリーグ戦優勝8回、国内カップ戦（コパデルレイ）優勝24回を数える名門クラブである。



Athletic ClubのホームスタジアムSan Mamés。収容人数はおよそ53,000人



またAthletic Clubは、1912年以降、バスク州に所縁のある選手のみで構成するという独自の哲学を貫いている。このため他のクラブと比べて獲得できる選手が限られるため、選手の育成とタレントの発掘にも力を入れている。結果、2018-19シーズンにヨーロッパサッカー五大リーグに所属するAthletic Club下部組織出身選手は26人に上り（これは全体の3位にあたる）国際的にも高い評価を受け、選手育成にも定評のあるクラブとして広く知られている。

• 下部組織出身の代表的な選手

- イケル・ムニアイン Athletic Club所属
- イニャキ・ウィリアムズ Athletic Club所属
- ケパ・アリサバラガ Chelsea FC所属
- アイメリク・ラポルテ Manchester City所属
- マルケル・スサエタ 元ガンバ大阪所属

• トレーニング施設 Lezama

ビルバオ市の郊外に、トップチーム及び下部組織のトレーニング施設 Lezamaがある。1971年に建設され、スペインで最も古い（ヨーロッパで二番目に古い）トレーニング施設にあたる。「Lezama」とはAthletic Clubのトレーニング施設の総称（この地区の名前に由来する）であると共に、Athletic Club下部組織の呼称としても用いられる。主な施設は以下の通りである。

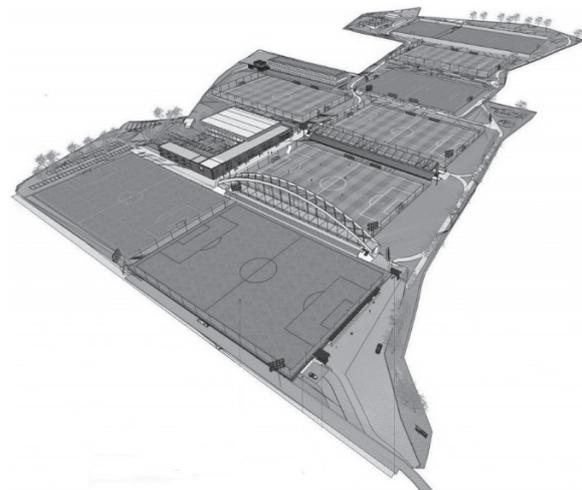


トレーニング施設 Lezama。下部組織からトップチームまで全てのカテゴリーがここでトレーニングを行っている。

- 天然芝 4面
- 人工芝 4面
- 7人制サッカー専用グラウンド 1面
- GK専用トレーニンググラウンド 1面
- 屋内トレーニング場
- トップチーム専用クラブハウス
- 下部組織専用クラブハウス

• 選手寮

Athletic Clubはトレーニング施設 Lezamaから車で10分ほど行った場所に寮を完備している。トレーニングに



トレーニング施設 Lezama



寮の外観



選手の部屋



トレーニングルーム



勉強部屋

通うのが困難な遠方に住む選手向けである。寮と言っても Athletic Club 専用の宿泊施設ではなく、一般のホテルのワンフロアを貸し切って寮として使用している。一般の宿泊客と同じ場所で生活することで、選手に社会性や協調性、一般常識を身に付けさせる狙いがある。また、同じフロアには大学生専用の寮もあるため、サッカー以外の仲間を作ることと勉強の重要性を知ることにも役立っているという。施設内には簡易なトレーニングルームや勉強部屋、プレイルーム、食堂などが備わっており、30名ほどの選手が生活を送っている。

• カテゴリー表

カテゴリー	年齢区分	所属リーグ
ATHLETIC BILBAO (トップチーム)	年齢制限なし	スペイン1部リーグ所属
BILBAO ATHLETIC (2ndチーム)	23歳以下	スペイン3部リーグ所属
CD BASCONIA (3rdチーム)	21歳以下	スペイン4部リーグ所属
JUVENIL A	18～19歳	バスク州リーグ所属 (最上位リーグ)
JUVENIL B	16～17歳	ビスカヤ県1部リーグ所属
CADETE A	15歳	バスク州リーグ所属 (最上位リーグ)
CADETE B	14歳	ビスカヤ県1部リーグ所属
INFANTIL A	13歳	ビスカヤ県リーグ所属



カテゴリー	年齢区分	所属リーグ
INFANTIL B	12歳	ビスカヤ県リーグ所属
ALEVIN A	11歳	ビスカヤ県リーグ所属
ALEVIN B（7人制サッカー）	10歳	ビスカヤ県リーグ所属

③U10、U11、U12のトレーニング

Athletic Clubでは、監督からの様々な要求に応えることのできる選手の育成を目指している。今日一人の選手がプロのキャリアを一つのクラブで終えることは非常に珍しく、またプロの世界では試合結果、選手マネージメント、フロントとの関係を理由に監督交代が頻繁に起こる。よって現代の選手には、プレーする環境や求められる要求が多岐にわたることを想定した上で選手育成に取り組む必要があるという。以上のような考えから、Athletic Clubでは週末に行われるリーグ戦の対戦相手の特徴を考慮してトレーニングを組み立てることはしない。選手が攻撃的でポゼッションスタイルのチームでプレーすることになっても、あるいはカウンター攻撃の構築を得意とする監督の下でプレーすることになっても困らないようトレーニングしている。

・週間スケジュール

U10

時間\曜日	月	火	水	木	金	土 or 日
19:00 ～ 20:30	TR:屋内 (30分)	TR:屋外 グラウンド (60分)	OFF	TR:屋外 グラウンド	OFF	リーグ戦 or OFF
	TR:屋外 グラウンド (60分)	TR:屋内 (30分)				

U11

時間\曜日	月	火	水	木	金	土 or 日
19:00 ～ 20:30	TR:屋外 グラウンド (60分)	TR:屋内 (30分)	OFF	TR:屋外 グラウンド	OFF	リーグ戦 or OFF
	TR:屋内 (30分)	TR:屋外 グラウンド (60分)				

U12

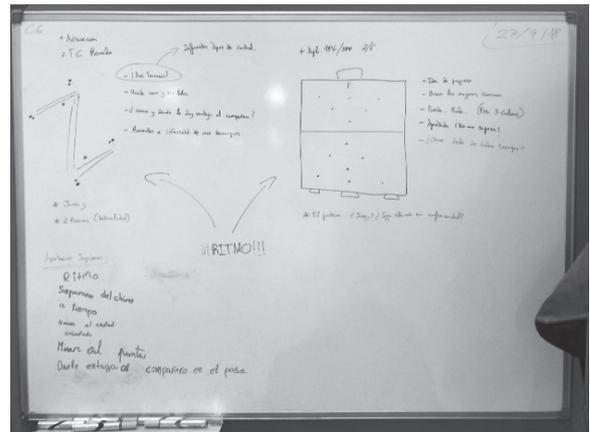
時間\曜日	月	火	水	木	金	土 or 日
19:00 ～ 20:30	TR:屋外 グラウンド	TR:屋外 グラウンド	TR:屋外 グラウンド	TR:屋外 グラウンド	OFF	リーグ戦 or OFF

・ トレーニング前

各カテゴリー、TR開始20分前にロッカールームにてミーティングを行う。事前にその日行うトレーニングの内容がホワイトボードに書かれているので、着替えを終えた選手から目を通す。そこから選手達は、トレーニングで肝となるキーファクターを書き出す。ミーティングは選手達によって書き出されたキーファクターに沿って進められる。この取り組みの狙いは、グラウンドでコーチの話す時間を短くし選手のプレー時間を確保することと、選手にその日のトレーニングで意識すべき点を明確にしてトレーニングに臨ませることにある。



ミーティングの様子



トレーニング内容が書かれているホワイトボード

【所感】

ミーティングではコーチから選手へ一方的な説明にならず、常に対話を意識しながらの進行が印象的であった。コーチが選手にキーファクターの確認をしたり、以前に何度か行っているトレーニングの場合は選手にルール説明を行わせることもあった。わからないことや疑問に思ったことは何でも口にする選手が多いため（スペイン人の国民性も影響している）、コーチよりも選手の話している時間が長かったり、選手からの質問が多くトレーニング開始時間に間に合わないことも頻繁にあった。これを日本に置き換えると、我々日本人は空気を読む（時間が迫っているから質問しない）や、人前で質問することに対して恥ずかしいと思う気持ちがスペイン人よりも強い傾向にあると感じる。そのためコーチが選手の意図を読み取り指導していくことも必要だと感じた。

また、事前に選手に対してトレーニングメニューとキーファクター（意識すべき点）を明確に伝えることで、確かにトレーニングの効率は上がる。しかし、コーチは何の情報も持っていない選手をグラウンドでコーチングとティーチングを使ってゴール（その日のトレーニングで選手に獲得させるもの）に導く能力も同じように大切なのではと感じた。選手の思考を止めず、刺激を与え続けるためにも、予定調和で進めるのではなく常に変化を加えることが必要だろう。



● 屋内トレーニング

U10とU11のみ、週に1時間（月曜日と火曜日に30分ずつ）屋内トレーニングを行う。屋内トレーニングではAthletic Club下部組織のフィジカルコーチが指揮を執り、ボールを使ったトレーニングとボールを使わないトレーニングを行う。

ボールを使ったトレーニングでは、個人技術をトレーニングする。Athletic Clubでは技術を2つに分けて考えており、個人技術とグループ技術が存在する。屋内トレーニングで行われるものは前者の個人技術であり、例えばリフティングや対面パス、コーンの間をジグザグに進むドリブルなど、味方との協力を必要としない技術やボールフィーリング能力である。年齢が上がるにつれて獲得が難しいとされる技術のため、U10とU11で取り入れられている。

ボールを使わないトレーニングでは、スキップやラダートレーニング、走る時のフォーム（腕を振る、腿を上げるなど）をトレーニングする。内容はサッカーに特化した動きではなく、全てのスポーツに共通して必要とされる動きを学ぶ。年齢が上がるにつれてサッカーに特化した動き、例えば短い距離の連続したスプリントや方向を変えて走る（ジグザグ）、ジャンプ後にスプリントをするなど2つ以上の動作が組み合わさる動きをトレーニングしていく。



屋内トレーニング場の大きさは45×30m



トレーニングの様子

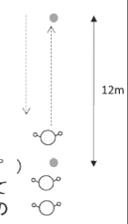
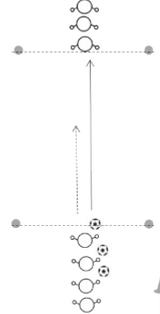
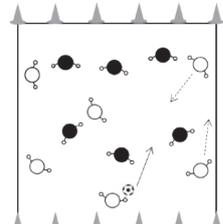
【所感】

トレーニング中の選手の表情を観ていると、トレーニングというよりも遊びに近いように感じた。小学生が遊ぶ放課後の校庭や、街中にある公園のような雰囲気である。屋内でのトレーニングは30分のみだが、メニューが頻繁に変わり、コーチが全体をフリーズして説明することも少ないため選手たちはのめり込むように取り組んでいた。ボールを使ったトレーニングでは苦手な足でのプレーも要求されており、左右両足でプレーできることの重要性が語られていた。またリフティングの苦手な選手が非常に多かったが、これはAthletic Clubの選手に限らない。2年間の研修生活で様々なクラブのトレーニングを観に行ったが、リフティングをトレーニングに取り入れているチームもなかったことからスペインではあまり重要視されていない印象を受けた。ボールを使わないトレーニングでは、スキップやクロスステップが

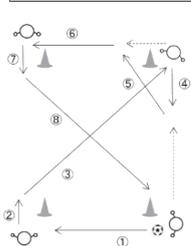
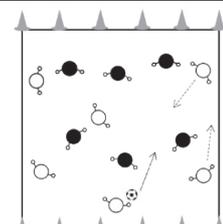
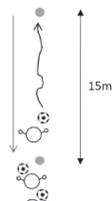
できない選手や猫背で姿勢の悪い選手が多くいた。この年代のボールフィーリング能力やコーディネーション能力は圧倒的に日本人選手の方が高いと感じた。

・U10トレーニング例

月曜日

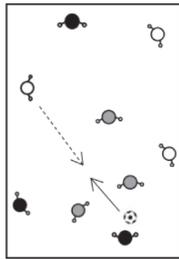
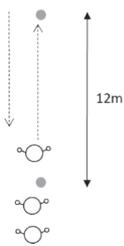
1、屋内トレーニング	2、1対1の守備の対応	3、ラインゴール
<p>【ボールなし】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①ジョギング ②スキップ ③腿上げ ④サイドステップ ⑤バックステップ <p>【キーファクター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①腕を振る(肘を曲げる際は90°) ②地面に着地する際膝を曲げて再び飛び上がる際は地面からの反動を利用する ③腿上げる際前かがみにならない 	<p>【ルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1対1のラインゴール ・守備側はボールを奪ったら相手側のライン突破を目指す。 ・サイズ:16×7m <p>【キーファクター】</p> <p>守備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パス後できる限り寄せる。寄せることでコントロールミス誘う。 ・常にボールを見て対応すること。フェイントに惑わされないためボールホルダーの上半身は見ない。 ・後ろ向きの相手に対しては奪いにいく。ただしファールに気をつけること。攻撃選手の背中を手で触らない(手で背中を押すとファールになる)。 	<p>【ルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6対6、6ラインゴール ・中央ゴールは8m、サイドゴールは5m(ゴールへの最短距離は常に中央という意識を持たせるため) ・サイズ:38×35m <p>【キーファクター】</p> <p>攻撃</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カバーがない1対1の状況では仕掛ける。 <p>守備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴールを守るのではなくボールを奪いに行く。 <p>【所感】</p> <p>攻撃</p> <ul style="list-style-type: none"> ・味方を観ながらポジションをとっているのがチームとして幅と深みが失われない。 <p>守備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを奪いに行く際はまず相手の身体にコンタクトして相手のバランスを崩している。コンタクトを避ける選手がいない。 
<p>【ボールあり】</p> <p>リフティング(1人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①右足のみ ②左足のみ ③ヘディングのみ ④自由 <p>リフティング(2人組)</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤右足のみ ⑥左足のみ ⑦ヘディングのみ ⑧自由 <p>【コーチの話】</p> <p>11歳までは苦手な足でのプレーにも重きを置いてトレーニングをする。12歳以降も苦手な足でのトレーニングをしたり要求もするが改善は難しい。</p>		

火曜日

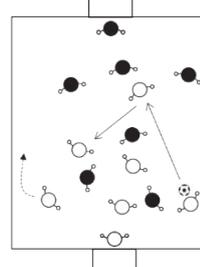
1、パス&コントロール	2、ラインゴール	3、屋内トレーニング
<p>【ルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①→②コントロールでコーンを越える→③グラウンダーのロングボール→④ワンタッチで落としてワンツース→⑤→⑥→⑦コントロールでコーンを越える→⑧浮き球ロングボール ・パス後パスを出した場所へ移動 ・サイズ:22×15m <p>【キーファクター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイミング(ボールを受けたい場所にいるのではなくそこに現れる) ・パスの強さを考える。いつ強いパスでいつ弱いパスか  <p>【所感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コントロールミスが多いためタイミングが合わない。 ・コントロールしてから次のタッチが速い。 ・受け手が小刻みにステップを踏んで待っているためパスがズレてもマイボールできる。 	<p>【ルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6対6、6ラインゴール、サイズ:38×35m ・中央ゴールは8m、サイドは5m(ゴールへの最短距離は常に中央という意識を持たせるため) <p>【キーファクター】</p> <p>攻撃</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールホルダーに対して右と左2つのパスコースを必ず与えること。そうすれば守備側は的を縛れなくなりドリブル突破のチャンスが増える。 ・ボールを奪った瞬間はドリブルよりもパスが効果的。なぜならボールを奪った瞬間はボールを奪うことに集中していたため視野が狭くどこにスペースがあるのか認識することが難しいため。 	<p>【ボールなし】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①ジョギング ②スキップ ③腿上げ ④サイドステップ ⑤バックステップ <p>【キーファクター】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①腕を振る(肘を曲げる際は90°) ②地面に着地する際膝を曲げて再び飛び上がる際は地面からの反動を利用する ③腿上げる際前かがみにならない <p>【ボールあり】</p> <p>動きながらのリフティング(1人)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①右足のみ ②左足のみ ③ヘディングのみ <p>ターン</p> <p>ターンの種類</p> <ul style="list-style-type: none"> ④足の裏 ⑤インサイド ⑥アウトサイド ⑦クライフターン 

木曜日

1、フィジカルトレーニング	2、ボールポゼッション	3、ゲーム形式
【ボールなし】 ①ジョギング ②スキップ ③腿上げ ④サイドステップ ⑤クロスステップ ⑥バックステップ ⑦前進→バックステップ→前進→... ⑧ジャンプ→両足着地 ⑨ジャンプ→片足着地(右足) ⑩ジャンプ→片足着地(左足)	【ルール】 ・6対3(3対3対3) ・ボールを奪われたチームが守備にまわる。 ・サイズ:24×14m 【キーファクター】 攻撃 ・サポートする際幅と深みだけにならないこと。 真ん中に1人サポートに入ること守備を中に集め外から前進することができる。 ・パススピード	【ルール】 ・7対7、システムは1-3-2-1 ・10分×2セット(2セット目は人数の関係でフリーマンが1人加わった) ・サイズ:68×52,5m 【キーファクター】 攻撃 ・中盤の2枚は外に広げず中でサポートする。 ・DFラインにボールがある際、CFとパスコースが重ならないよう注意する。



【所感】
 ・コーチからパススピードの要求もあったが、守備の奪いに来る意識が高いため、攻撃側のパススピードと足下にコントロールしないことが習慣化されていた。それがないと簡単にボールを奪われてしまう。また守備はボールを奪いに来る際身体にコンタクトしてくるため弱いパスを受け取る選手がおもいつ切り削られる場面もあった。守備の奪う意識が攻撃側のテクニックの向上に繋がると感じた。



【所感】
 ・左右のCBがフリーでボールを持つ機会は多いがパスを選択することが多いため後方の数的優位を前線に繋げることができていなかった。
 ・中盤の両選手はCFがボール受けた際3人目で受ける意識が高い。

【所感】

トレーニングを観て最も印象に残ったことは、コーチが選手の頭の中と身体を休ませずにトレーニングに取り組みさせていたことだ。トレーニング前にミーティングがあるため、コーチがグラウンドでメニューの説明やキーファクターを長々とすることはない。トレーニング中もコーチが全体をフリーズして何か伝えることは稀で、シンクロコーチングかアドバイスが必要だとされる選手のみを集めて個別に行われることが多い。コーチが各カテゴリー最低2人はいるので、この間ももう1人のコーチによって全体のトレーニングは進められる。選手が常に心拍数の高い状態で90分間トレーニングできるようオーガナイズされていた。

④タレントの発掘

Athletic Club含め、スペインのプロクラブの下部組織では入団テストは行っていない。基本はスカウトである。Athletic Clubでは地域レベルの底上げを目的とした「地域育成プロジェクト」のスタッフがスカウト活動を行っている。下部組織のコーチと地域育成プロジェクトのスタッフも兼務するウナイ・ロドリゲス氏から伺った、タレントの発掘について紹介する。

・地域育成プロジェクトとは

Athletic Club地域育成プロジェクトでは、バスク州ビスカヤ県のクラブを中心におよそ150のクラブと契約を結び、選手育成、指導者養成、タレントの発掘に取り組んでいる。20名のスタッフから構成されており、各スタッフには担当する地域やクラブがある。シーズン中はトレーニング見学やクラブスタッフとのミーティング、リーグ戦の視察を行い、プレシーズンや長期休暇には指導者講習会を開催している。Athletic Clubは、地域育成プロジェクトと契約を結ぶクラブの選手であれば、



他のクラブと競合しても優先的に選手を獲得することができ、その代わり各クラブにはAthletic Clubから金銭の補助や物品の提供などがある。

• スカウトする際の方法

i. リーグ戦視察

過去にAthletic Clubに所属していた選手やリーグ戦で目に留まった選手を定期的に追いかけて、最終的にはAthletic Clubのトレーニングに参加してもらい獲得するか否か決定する。スペインでは各クラブ全てのカテゴリーが年間を通したリーグ戦に参加している。地域によっても異なるが、年間で30試合前後を戦うリーグ戦には昇降格が伴う。また育成年代にも選手の移籍があるため、上位リーグを戦うチームは自然と能力の高い選手で構成される。つまり能力の高い選手は上位リーグのチームにしかいない。よってスカウトが見るべき試合は、各カテゴリーの最上位リーグに絞られる。実際、スペインの育成年代の代表スタッフも視察に訪れる試合は各地域の最上位リーグのみである。

ii. 情報提供

地域育成プロジェクトと契約するクラブからの情報提供で選手獲得を議論するケースもある。バスク州はスペイン全土でマドリード州、カタルーニャ州に次いでサッカーが盛んな地域であるため、州外のプロクラブから関心を寄せられる選手も多い。過去にあるスペインのプロクラブが地域育成プロジェクトと契約するクラブの選手を獲得するというケースがあった。Athletic Clubは地域育成プロジェクトと契約を結ぶクラブの選手であれば優先的に選手を獲得することができるようになっていたため、このような場合でも事前に連絡が入る。この時は地域育成プロジェクトもその選手の存在は知っていたが、獲得するレベルには至っていないという判断だったためオファーは出せず、最終的にその選手は州外のプロクラブへと移籍していった。

iii. スカウトと各カテゴリーの監督の関係

U16以下のカテゴリーの選手獲得に関しては基本的にはスカウトで決めることができる。しかしU17以上のカテゴリーの選手獲得は各カテゴリーの監督の意向も反映される。なぜならU17以上のカテゴリーになると、各選手の適したポジションはある程度決まってくるためポジション毎に選手を獲得する必要性が生まれてくるからである。よって監督がどのポジションの、どのような特徴を持っている選手を必要としているかを把握しスカウト活動を行う。

• 選手の観るべきポイント

i. 長所はあるか

選手の短所よりも長所に目を向ける。プロのサッカー選手として成功するためには、サッカーに必要な全ての要素を高いレベルで兼ね備えている必要があるが、現実問題そのような選手は稀である。その代わりに特定の能力だけは突出している選



手を見つければ定期的に追いかけるようにしているという。例えば、フィジカル能力では劣るが思考を止めない選手の例として、相手を背負った状態でボールを受ける際、一度相手に身体を当てて自分と相手の間にスペースを作る動きをする前線の選手や、天才肌の選手の例として、守備ではチームへの貢献度は低いですが、攻撃になるとゴールを演出する決定的なラストパスが出せるような選手である。

ii. メンタリティー

困難な状況での立ち居振る舞いを観る。失点後のチームを鼓舞するようなリーダーシップの発揮やミスした後のプレー、試合後の立ち居振る舞いを観て、強いメンタリティーの持ち主なのかどうかを判断する。その選手のチームの対戦相手が、上位のチームやプロクラブの下部組織といった勝利することが難しいであろう試合を事前にチェックして視察しに行けば、目当ての選手のメンタリティーに触れることができるという。

iii. ドリブル

相手を抜くドリブルを得意としている選手。サッカーにはコーチからの指導や普段のトレーニングによって獲得できる要素と、獲得が難しいとされる要素があるが、相手を抜くドリブルは後者だと考えられている。これは相手を抜くドリブルをする際にはボールを自由自在に操る能力が求められるためである。このような能力は幼少期からサッカーに触れている必要がある。これまでに目に留まった相手を抜くドリブルを得意とする選手は、左右差なく両足でボールを扱える、瞬発力がありスピードの緩急がつけられる、自身の得意とする形やフェイントを何か一つ持っている（マッシュフェイント、エラシコ、カットインからシュートなど）という共通点があった。

• 近年の懸念点

Athletic Clubはバスク地方出身の選手のみで構成されており、その歴史は100年以上も続く。しかし、近年スペインでは晩婚化や若い世代の事実婚という新たな価値観により少子化が進み、Athletic Clubがセレクトできる選手の数が減ってきている現状がある。そのため「バスク地方出身の選手」から「バスクに所縁のある選手」や「バスク地方と関わりの深い選手」というように表現を変え、セレクトできる選手の幅を広げている。表現が曖昧な理由はそのためである。因みに現在は次の3点のいずれかに当てはまればAthletic Clubでプレーする資格があると見なされる。

- バスク地方出身である。バスク地方とはバスク州、ナバラ州、フランス領バスク3州（ラブール州、低ナバラ州、スール州）を指す。
- 15歳までにバスク地方にあるサッカークラブで3年以上プレーした経験がある。
- 親族でバスク地方に所縁がある人物がいる。



下部組織コーチと地域育成プロジェクトスタッフを兼務するウナイ氏



U18バスク州リーグ



U17ビスカヤ県1部リーグ



U15バスク州リーグ

⑤特別研修3

2019年8月より1年間、ビルバオ市にある街クラブSANTUTXU F.C. U15でコーチとして研修にあたった。目的は、実際にスペイン人を指導して日本人との違いを知ることと、年間を通したリーグ戦が選手に与える影響を知ることである。

SANTUTXU F.C.はバスク州で強豪クラブの1つに数えられている。そのため毎シーズンAthletic Clubに引き抜かれる選手やAthletic Clubから契約更新されなかった選手が活躍の場を求めに来るクラブとしても知られている。2019-20シーズン、我々はU15年代の最高峰に当たるバスク州リーグを戦った（スペインの育成年代ではU18を除いて全国一を決める大会はない）。なお、新型コロナウイルスの影響により23節終了時点（全34節）でリーグは打ち切られている。順位は18チーム中10位。

【所感】

• トレーニングから感じたこと

i. トレーニングをオーガナイズする際に注意すべき点

テクニックを磨くための相手がいないトレーニングをする際は、説明に様々な工



夫が必要だと感じた。どのポジションの選手によく起こることなのかの説明、ホワイトボードを使っての説明、デモンストレーションを入れる、コーチが静的な守備役として加わるといった工夫である。なぜなら、選手は目の前のトレーニングと実際のゲームがリンクしないと動かないからである。よって選手の頭の中にゲームのどの場面を切り取ったものなのかの具体的なイメージを植え付けることができるかどうか、トレーニング活性化のキーとなる。

ii. トレーニング活性化のキー

スペイン人は勝負に対するこだわりが非常に強い。ウォーミングアップでもゲームでも、例えば悪いが勝つためにはズルをしてもよいし、そのズルも指摘されなければズルではないという印象を受ける。勝つためにどう行動するかを常に考えている。指導する際に彼らの性格を活かす方法があるとすれば、競争的要素を加えることだろう。我々のチーム問わず、様々なチームのトレーニングを見学しに行くと競争的要素が含まれていることが非常に多い。このようなことから、スペイン人はトレーニングを勝つために、日本人は上達するために行っていると感じた。

• リーグ戦を通して感じたこと

i. 勝負に対するこだわり

勝負に対するこだわりは日本人よりもスペイン人の方が強いと感じた。これは幼少期から練習試合よりもリーグ戦を中心に戦ってきた経験からくるものだと考える。なぜリーグ戦を戦うことで勝負に対するこだわりが培われるのか。基本的に練習試合では、個人のレベルアップやチーム戦術の理解を深めるために結果よりも内容を重視する傾向にある。リードして試合の終盤を迎えても、監督は逃げ切ることより普段トレーニングしていることを発揮するよう選手に求める。しかしリーグ戦で同じ状況を迎えれば、選手交代をして時間稼ぎをしたり、システムを守備的に変更したりして内容よりも結果を求めに行く。なぜならリーグ戦では順位があり、負けが続けば監督はクビになる恐れがあるからだ。よって選手への指示は内容よりも結果を意識したものになる。幼少期からこの環境に身を置いている選手達にも自然と勝負に対するこだわりが生まれるだろう。SANTUTXU F.C. U15の2019-20シーズンの試合数を見てみると、リーグ戦は全部で34試合（リーグ戦が通常通り行われた場合）、練習試合はプレシーズン、クリスマス休暇、聖週間（春休み）中に行われる計10試合だった。

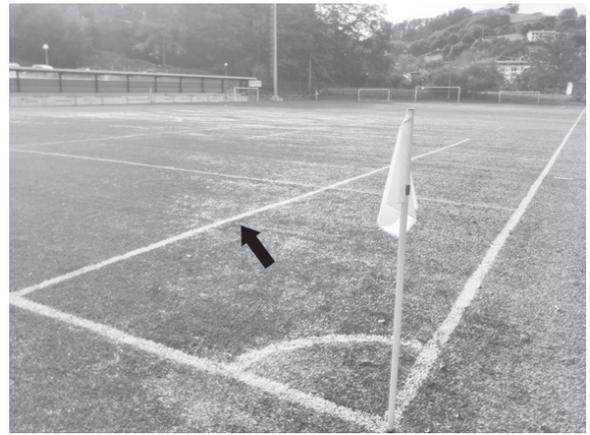
ii. 異なるプレスタイルの獲得と球際の戦い

日本では考えられないが、スペインではクラブによってグラウンドのサイズが異なる（正規の105×68mよりも小さい）。2019-20シーズン、我々が正規のサイズで戦った試合はわず

クラブ	グラウンドサイズ
SD EIBAR	100×66m
SANTUTXU F.C.	100×62m
Tolosa Club de Futbol	100×60m
Vasconia, C. D.	100×54m
DEUSTO, S. D.	99×61m
Danena K. E.	91×46m
Olarizu, C. D.	90×65m

か3試合のみで、毎週末サイズの異なるグラウンドでプレーしていた。その日常から自然と獲得できるものが2つあると感じた。

1つ目は異なるプレースタイルの獲得である。グラウンドを広く使いボールを動かそうとしたところでそもそも横幅が狭いため相手がズレない。またグラウンドの縦も短いため13歳にもなればGKやDFラインから簡単に相手ゴール前にロングボールを送ることができてしまう。そのため多くのチームは、ロングボールを多用して縦



Danena K. E.のグラウンド。黒矢印がペナルティエリアの横幅

に速く攻める。しかし正規のサイズに近いグラウンドで実力の劣る相手と戦う時、ロングボールで得点チャンスを創出することは非常に難しい。なぜなら、このようなチームは一般的にDFラインを低く設定し守備的に戦ってくるからだ。そのためボールを保持し相手を揺さぶりながら相手を引き出すようなプレーが求められる。以上のことから、毎週末サイズの異なるグラウンドでプレーすることで、縦に速いスタイルとポゼッションスタイル両方をトレーニングするようになる。

2つ目は球際の戦いの創出である。基本的にどのクラブのグラウンドも正規のサイズを満たしていない。グラウンドが狭いこともあり、試合を見ているとボールを奪い奪われの攻守の切り替えの局面が多いことと、選手同士のコンタクトが多いことに気付く。当初は攻守が目まぐるしく変わりボール周辺に選手が密集することもあってごちゃごちゃしている印象を受けた。しかし異なる視点で見ると、球際の戦いの多さとその激しさが浮かび上がってくる。バスク人の特徴と言われている勇敢さも手伝って、球際で怯む選手はいない。相手の足を意図的に削るような警告に値するファールも多いが、ファールを受けた選手が何事もなかったかのように立ち上がり次のプレーへと切り替えていく様子からはこれが日常なのだろうという印象を受ける。日本でトレーニングをオーガナイズする際は、ポゼッションやゲームを意図的に小さいサイズにすることで、球際の戦いの強化に繋がるだろう。

iii. 自分の実力を把握する

日本でサッカーをやっている子供たちに将来の夢を聞くと、多くの選手は「ヨーロッパでプレーすること」、「日本代表になってワールドカップに出場すること」と答える。しかしスペインの子供たちに同じ質問をしても違う答えが返ってくる。「プロサッカー選手」とは答えない。私はそれがスペインのリーグ戦を中心とした育成システムにあると考えている。各カテゴリーに上位リーグから下位リーグまでレベル別のリーグ戦が存在するため、実力的に優れている選手は自然と上のカテゴリーに引き上げられる。そのため選手は今プレーしているリーグのレベルから自分のサッカー選手としてのレベルを客観的に把握することができ、将来自分がプロ



SANTUTXU F. C. U15集合写真

サッカー選手になれるチャンスがあるのかどうか嫌でもわかってしまう。実際 SANTUTXU F. C. U15の選手に将来の夢を聞いたところ、プロサッカー選手と答えたのは1人だけだった。因みにこの選手はプレシーズン中にAthletic Clubから声がかかりトレーニングに参加した選手である（最終的には契約に至らなかった）。監督に選手の反応を伝えた所、「15歳の時点で街クラブにいる選手にサッカー選手になれるチャンスはほぼない。そんな選手は既にAthletic Clubに引き抜かれている。このことは選手が一番理解しているだろう。また15歳の選手が15歳のリーグに出場している場合も同じように難しいだろう。15歳で将来有望な選手は既に17歳や18歳のカテゴリーでプレーしている」とのことであった。リーグ戦のシステムが選手に現実を教え、システムが整っているからこそ選手は背伸びをせず、自分のレベルにあった目標を立てるようになる。

（4）研修を終えて

2年間の研修生活では、スペイン育成年代のトップレベルに属する選手たちのトレーニングやリーグ戦を間近で観ることができた。そこからサッカー日本代表が世界でトップ10のチームとなりFIFAワールドカップで優勝するために、今後日本の育成年代でさらに伸ばしていく点と改善すべき点について私が感じたことを述べたいと思う。

今後さらに伸ばしていく点に関しては、まずテクニック面が挙げられる。リフティングや向かい合っのコントロールとパスのトレーニングでは精度が高く、すぐに結果として現れないがコツコツと努力を続けることのできる日本人の性格も手伝って非常に高いレベルにある。今後の課題としては、そのテクニックを試合の中でも発揮できるようトレーニングに反映していくことだろう。試合の中でも発揮できるとは、相手のプレッシャーの中で発揮できること、トップスピードに乗った状態での正確なボールコントロールやその選手に合わせるパスを出せること、そして左右両足で同じようにボールを扱えるといったことである。そのためには、コーチのトレーニングオーガナイズが重要になってくるだろう。その日トレーニングしていることは試合の

どの場面で必要とされるものなのかを具体的に伝え、選手自身が頭の中でイメージできるように導く必要がある。メンタル面に関して言うと、人の話を聞く姿勢や何でも吸収してやろうという情熱も大きなアドバンテージだろう。日本での指導経験から、日本の選手は常に学ぶ意欲に溢れており、向上心の高い選手が多いと感じる。2年間の研修生活では、日本からスペインへ遠征に来たクラブの手伝いもさせてもらった。多くの選手はコーチからのアドバイスやトレーニングで感じたこと、試合の反省点などをノートに書き留めていた。コーチの方々も、遠征中に行った練習試合の対戦相手のスタッフから自チームの印象や課題を聞いたり、週末にはカテゴリーの異なるリーグ戦を渡り歩く姿があった。

改善すべき点に関しては、状況に応じた適切な判断を下すという部分は継続してトレーニングしていかなければいけないと感じた。状況と言っても、時間帯やスコアなど様々あるがここでは相手のことを指す。正直すぎるプレーが多く、すでに相手に読まれていることや、相手の状況を把握することなく相手が密集しているところへ攻め急ぐなど、相手を観てプレーを選択することが欠けているように感じる。この原因はボールを受ける前の準備にある。ボールを受ける前に身体の向きを取り、首を振って周囲の状況を把握する。そうすることにより、どこでボールを受ければ相手が嫌がるのか、どこにコントロールすればボールを失わないのか、あるいは前進できるのかが決まってくる。改善のためにはテクニックと戦術を分けて考えるのではなく、ミックスしてトレーニングしていく必要があるだろう。相手がいるトレーニングでボールを持っていない時のプレーを改善することで、日本人のストロングポイントでもあるテクニックがさらに活きると感じた。

(5) その他

帰国後は日本サッカー協会のJFAアカデミー福島で選手育成に携わることになっています。スペインで学んだことや感じたことをそのまま取り入れるのではなく、日本の文化や日本人選手の特徴に合わせてアレンジし、伝えていくことが大切だと考えています。本研修で得られた知識や人脈を最大限活用し微力ながら日本サッカー界発展に貢献していけるよう努めていきます。最後にこのような研修の機会を与えて頂いた日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、日本サッカー協会、その他関係者各位に心より感謝申し上げます。

研修員報告 〈スキー／アルペン 河野 恭介〉



平成30年度・長期派遣（スキー／アルペン）



I. 研修題目

アルペンスキー強豪国オーストリアにおけるスキー連盟の強化体制、方法の視察。またオーストリア国内の指導者資格取得とそのための語学習得。

II. 研修期間

平成30年7月10日～令和2年12月27日（新型コロナウイルスによる中断期間含む）

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

オーストリアスキー連盟（Österreichischer Skiverband 以下ÖSV）
 アールベルグスキークラブ（Arlberg Skiclub）

（2）受入関係者

Peter Schröcksnadel（ÖSV President）
 Hans Pum（Ex Sport Director）
 Anton Giger（Sport Director）
 Andreas Puelacher（Ski Alpin Herren Chef trainer）
 Marko Pfeifer（Welt Cup Slalom Herren Gruppen Chef trainer）

（3）研修日程

①通常研修

期間	研修先	内容
2018年8月～ 2019年6月30日	ÖSV Weltcup Herren Plakutikum Trainer （オーストリア代表男子チーム研修生）	ÖSVにおける組織運営と強化方法の視察
2019年7月1日～ 2020年12月27日	ÖSV Weltcup SL Herren Assistenz Trainer （オーストリア代表男子SLアシスタントコーチ）	実際のチーム運営と現場での指導の実践
2019年4月～ 2020年12月	ÖSV Alpin Ski D Trainer Kurs （オーストリアスキー連盟Dコーチ資格受講）	コーチ資格の取得

②特別研修

期間	研修先	内容
2019年3月12日～3月17日	世界チルドレン選手権大会（Forgaria, ITA）	大会視察

IV. 研修概要

(1) 研修題目の細目

- ①ÖSV男子アルペンチームの構成
- ②ÖSV男子アルペンチームの年間活動の流れ
- ③コーチの役割、仕事
- ④オーストリアでのアルペンスキーコーチ資格
- ⑤ÖSVにおけるスポーツ科学の応用
- ⑥他強豪国の強化方法

(2) 研修方法

1989年から2019年まで、ワールドカップ国別ランキングで常に1位をキープしてきたオーストリアスキーチームに2018/19シーズンは研修生として帯同し、研修を行った。このシーズンはオーストリアスキー連盟が抱える技術系5グループそれぞれに帯同し、翌シーズンは研修生ではなくボランティアコーチとして国際スキー連盟登録され、正式にワールドカップ回転チームに帯同することで研修を行った。2年間を通してチームの運営やトレーニングに携わると同時に、コーチ資格を受講することで技術の理論や指導方法と実際の現場での指導を照らし合わせながら研修を行うことができた。夏季にはコンディショニングトレーニング合宿に参加し、年に2回行われる体力測定も視察することでコンディショニングの観点からも強化の方法を探った。ワールドカップだけでなくヨーロッパカップやさらに下のカテゴリーへの視察も行い、各年代の強化方法も併せて視察した。

(3) 研修報告

①ÖSV男子アルペンチームの構成

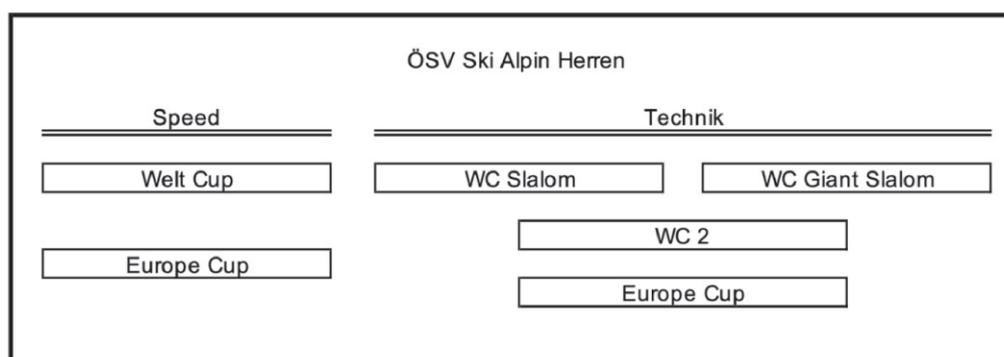


図1 ÖSV男子チームのグループ構成

男子アルペンチームは高速系 (Speed) と技術系 (Technik)、そしてジュニアチームの三つで構成されている。さらに高速系は2つのグループ、技術系は4つのグループに分かれている。日本人選手が出場している技術系に着目してみると、ヨーロッパカップ、ワールドカップII、ワールドカップ大回転、ワールドカップ回転といったグループ分けになっている。このグループ分けが意味することは1種目のみのスペシャリストが一定数おり、それぞれの選手のニーズに応え最適なトレーニングを行っている



ということである。複数種目に出場する選手もいるので、適宜他グループと連携をとりながら常にベストなトレーニング環境を求めて活動している。また選手の振り分けにも工夫があり、怪我をした高速系の選手をシーズン初めには大回転チームにて活動させ、低い負荷で技術練習を積ませ、コンディションが上がってきた段階で高速系チームと合流するといった手法をとる場合もある。選手層が厚い強豪国であるからこそ可能なシステムで、効率良い強化を目指したグループ構成が行われている。

基本的にグループのコーチは長期スパンで活動しており、回転チームは既に6シーズン同じスタッフで活動している。ÖSV内、そして他国を見ても強豪チームのスタッフはここ3年間で変わらず、長期的な強化プランのもと活動していることが伺える。単年でスタッフが入れ替わっているチームは苦戦が強い印象である。また、下位グループの選手が上位グループに上がってくる時には一貫した指導のためにコーチも共に異動するケースが多い。

グループの構成は、ワールドカップ回転チームの例を挙げると選手6名に対し、コーチ4名（筆者含む）、フィジオ2名、コンディショニングコーチ1名となっている。しかしワールドカップ2チームでは選手5名に対し、コーチ2名、フィジオ1名とコンパクトなチームになっている。チーム内でコンディションの良い選手は上位チームと合流して練習するチャンスが与えられる。こうしてチーム内で競争し、さらにレベルの高い選手と下位選手がトレーニングすることで若手選手にも良い影響となる。こうした効果まで考慮した上でグループを編成する点は日本チームのような小さいチームも見習うべきだと感じた。

ÖSVのコーチの給与は役職に応じて異なるが、勤続年数に応じても違いがある。給与制度も含め長期的な強化プランに対するコーチ育成も重要になってくる。コーチの資格制度は別項にて述べる。

②ÖSV男子アルペンチームの年間計画と活動の流れ

1) オフ期

前シーズンの分析、反省をもとにグループチーフによってシーズンの計画が立てられる。基本的には5月から7月までは毎月5日～10日ほど雪上練習が組まれ、主にマテリアルテストと基本技術の習得、見直しを主な目的として行う。それ以外は各地でコンディショニングトレーニングが行われ、チームビルディングの意味も含めコンディショニングトレーニングの合宿も数回行われる。コンディショニングトレーニングの成果を見るために春と秋にそれぞれ体力測定を行い、怪我明けの選手は雪上復帰の指標にも活用する。

2) 試合準備期

8月になると本格的な雪上トレーニングがスタートする。ヨーロッパ内で合宿を行う場合は長くても10日ほどの期間で、フィジカルの維持向上も重要になるためコンディショニングトレーニングとのバランスを考えながらトレーニングブロックを組んでいく。夏のキャンプ地の選定はトレーニングの目的によって異なり、ヨーロッパの水河か南半球で行われる。滑走量を確保したい場合や、冬のコンディションで

APRIL			MAI			JUNI			JULY		
	Plan			Plan			Plan			Plan	Disziplin
1	MI		1	FR	Zillertal	1	MI		1	MI	
2	DO		2	SA		2	DO		2	DO	
3	FR		3	SO		3	FR		3	FR	
4	SA		4	MO		4	SA		4	SA	
5	SO		5	DI		5	SO		5	SO	
6	MO		6	MI		6	MO	Anreise	6	MO	
7	DI		7	DO		7	DI	Mölltal	7	DI	
8	MI		8	FR		8	MI		8	MI	
9	DO		9	SA		9	DO		9	DO	
10	FR		10	SO		10	FR		10	FR	
11	SA		11	MO		11	SA		11	SA	
12	SO		12	DI		12	SO		12	SO	
13	MO		13	MI		13	MO		13	MO	
14	DI		14	DO		14	DI		14	DI	
15	MI		15	FR		15	MI		15	MI	
16	DO		16	SA		16	DO		16	DO	
17	FR		17	SO	Anreise	17	FR		17	FR	
18	SA		18	MO	Sölden	18	SA		18	SA	
19	SO		19	DI		19	SO		19	SO	
20	MO		20	MI		20	MO		20	MO	
21	DI		21	DO		21	DI		21	DI	
22	MI		22	FR		22	MI		22	MI	
23	DO		23	SA		23	DO		23	DO	
24	FR		24	SO		24	FR		24	FR	
25	SA		25	MO		25	SA		25	SA	
26	SO		26	DI		26	SO		26	SO	
27	MO		27	MI		27	MO		27	MO	
28	DI		28	DO		28	DI		28	DI	
29	MI		29	FR		29	MI		29	MI	
30	DO	Anreise	30	SA		30	DO		30	DO	
			31	SO					31	FR	

図2 ÖSV男子回転チームの春季活動例

トレーニングを行いたい場合は南半球でキャンプを行う。氷河は標高が高いため負荷も高くなり滑走量が少なくなるが、移動時間が少なくなるためフレキシブルな日程変更が可能になる。そのため春の期間に十分なトレーニングを行っていてコンディショニングにも重点を置きたい場合は、短期間の氷河でのトレーニングと自宅でのコンディショニングを組み合わせ合宿を行う。このようにそれまでのトレーニング量や各選手の課題に応じてキャンプを行なっていく。

9月以降は週2-4日ほどの雪上練習を行いながらレースに向け準備を始めていく。トレーニング場所の選定は天候と雪質、そしてコースレイアウトを考え決めていく。まず天候と雪質が一番重要である。晴れて日中の気温が下がらない時期の雪は、夜間に放射冷却により固まるので、降雪があると固まりきらずトレーニングするには難しい雪質になる。このためトレーニング地を決める場合は常に天気予報をチェックし、本当に正確な情報が必要になる場合は気象庁に問い合わせ、どの程度雲がかかり、何時から晴れるのかといった細かな予報をもとに判断する。気温が下がりきらなかった場合を想定して雪面硬化剤や塩を事前に準備し、狙った日数、そして雪質でのトレーニングが行えるようにすることも大事なことである。

レース初戦までの準備期では、選手によって取り組む課題が異なることが大いにあり得る。そういった場合には選手の優先順位によってトレーニング内容が決まってくるが、場合によってはトレーニング日を変えて実施したり、他チームとの合同トレーニングに切り替えて本隊とは別のトレーニングを行ったりといった対応が取られることがある。また、レース直近になるとレースの種目に応じて事前準備が必要になる。スタッフの割り振りやトレーニング場所の確保のため種目別にプランを変え(図3参照)別行動になることも事前に想定する必要がある。

AUGUST			SEPTEMBER			OKTOBER			NOVEMBER			
	Plan A	Plan B		Plan A	Plan B		Plan A	Plan B		GS / SL	SL	SL Plan B
1 SA			1 DI			1 DO			1 SO			
2 SO			2 MI			2 FR			2 MO	Flug Levi		Suomutunturi
3 MO			3 DO			3 SA			3 DI	Levi - Rennhang	Reiteralm	Suomutunturi
4 DI	Anreise S1	Anreise S1	4 FR			4 SO			4 MI	Levi - Rennhang	Reiteralm	Suomutunturi
5 MI	Wittenburg SL/PSL	Wittenburg SL/PSL	5 SA			5 MO	Anreise S6	Anreise S6	5 DO	Levi - Rennhang	Reiteralm	Suomutunturi
6 DO			6 SO			6 DI	Molltaler G	Molltaler G	6 FR			
7 FR	Technik	Technik	7 MO			7 MI	Molltaler G	Molltaler G	7 SA			
8 SA			8 DI			8 DO	Molltaler G	Molltaler G	8 SO			
9 SO			9 MI			9 FR	Molltaler G	Audi + Einkleidung	9 MO			
10 MO	Anreise S2		10 DO	Anreise S4		10 SA	Einkleidung	Einkleidung	10 DI			
11 DI	Saas Fee		11 FR	Saas Fee		11 SO			11 MI	Training	Anreise S9	Anreise S9
12 MI			12 SA			12 MO			12 DO	Levi Rennhang	Levi Rennhang	Levi Rennhang
13 DO			13 SO		Anreise S4	13 DI	Anreise S7	Anreise S7	13 FR	Training	Levi Rennhang	Levi Rennhang
14 FR			14 MO			14 MI	Sölden Rennhang / Molltal	Molltaler G	14 SA	Lech/Zürs PGS, ATE	Levi Rennhang	Levi Rennhang
15 SA			15 DI			15 DO	Sölden Rennhang / Molltal	Molltaler G	15 SO	Lech/Zürs PGS, ATE	Pause	Pause
16 SO	Anreise S2		16 MI			16 FR	Sölden Rennhang / Molltal	Molltaler G	16 MO		Suomutunturi	Suomutunturi
17 MO			17 DO			17 SA	Sölden Rennhang / Molltal	Molltaler G ??	17 DI	Flug FIN	Suomutunturi	Suomutunturi
18 DI			18 FR			18 SO			18 MI	Suomutunturi	Suomutunturi	Suomutunturi
19 MI		(Reserve Plan)	19 SA			19 MO			19 DO	Suomutunturi	Suomutunturi	Suomutunturi
20 DO			20 SO			20 DI	Pitztal / Molltal / Schnals	Pass Thurn / Schnals	20 FR	Suomutunturi	Suomutunturi	Suomutunturi
21 FR			21 MO		Anreise S5	21 MI	Pitztal / Molltal / Schnals	Pass Thurn / Schnals	21 SA	Training / Hill skiing	Training / Hill skiing	Training / Hill skiing
22 SA			22 DI	Anreise S5		22 DO	Pitztal / Molltal / Schnals	Pass Thurn / Schnals	22 SO	Levi SL	Levi SL	Levi SL
23 SO			23 MI	Pitztal / Sölden		23 FR	Anreise Sölden		23 MO	Flug US		
24 MO			24 DO			24 SA	Training		24 DI	Pause		
25 DI			25 FR			25 SO	Sölden GS		25 MI	Cooper	PGS / GS Training	PGS / GS Training
26 MI			26 SA			26 MO			26 DO	Cooper	PGS / GS Training	PGS / GS Training
27 DO	Anreise S3	Anreise S3	27 SO			27 DI	Sölden	Sölden	27 FR	Cooper	PGS / GS Training	PGS / GS Training
28 FR	Saas Fee		28 MO			28 MI	Sölden	Sölden	28 SA	Pause		
29 SA			29 DI	Sölden		29 DO	Sölden	Sölden	29 SO	Cooper		
30 SO			30 MI			30 FR			30 MO	Cooper	Training	Training
31 MO						31 SA						

図3 ÖSV男子回転チームの試合準備期活動例

秋口は積雪量によってトレーニングが可能な場所が変わってくる。積雪量や雪が降り始める時期、人工降雪機が稼働できる気温にまで下がるタイミングは年によって異なるため、プランAとプランBを用意する（図3参照）。基本的にオプションが多いということは、それだけ良いトレーニングができる可能性が高まるので場合によってはプランCも設ける。また、トレーニングの進捗状況によっても難易度の高いコースに移動するかどうか判断することになるため、そういった状況も考慮してトレーニングオプションは多いほうが良い。

3) 試合期

ワールドカップのスケジュールは秋の段階で発表され、これに応じておおよそのトレーニングスケジュールを決める。ハイシーズンは毎週末に試合があるような状況が続くので、常に大会を想定して準備をする。コースレイアウトや雪質が近くなるように情報収集は欠かせない。トレーニング地は基本的にオーストリア内で選ぶことが多く、天候なども考慮しながらレース会場に近い場所で行う。大会地でのトレーニング環境は保証されていないので、自分たちで準備してトレーニングを行うほうが確実である。そのため、車で片道4時間程度なら前日に練習した後に移動することが多く、それ以上遠い場合はヘリコプターで移動することもある。

③ コーチの役割、仕事

アルペンスキーにおけるコーチの役割は多岐にわたり、他のスポーツでは考えられないような作業も多くある。ÖSVのコーチの業務内容は以下である。

1) トレーニングコースのオーガナイズ

まずはトレーニングコースを予約することから始まる。ピステンシェフと呼ばれるコースを管理する人が各スキー場において、その人にコンタクトしトレーニングするコースを選び、水を入れる必要がある場合は可能かどうか、またホースの用意など様々な交渉や手配をする。トレーニングコースの予約をする場合には、ドイツ語や英語の能力が必須になる。また、プライオリティは強いチームや地元のチームに



あり、ワールドカップチームから順にコースが選ばれていく。コネ文化が根強く、顔見知りになるということも重要になってくるのでスタッフが長いスパンで強化していくこともメリットになる。

2) コース作り

トレーニングをする際に重要になってくるのが雪質である。アルペンスキーでは同じコースを全選手が滑るため、ある程度硬く締まった雪にする必要があり、ワールドカップを始めとする各レースでは事前にコースに水を撒き、凍らせることで硬いコースを作る。深い溝や穴ができると安全面での問題も生じ、スタート順による影響も大きくなってしまうため、安全でフェアなレースにするためにワールドカップでは1週間前に大会コースを閉鎖し、準備を行う。トレーニングも同様の理由でコースを硬くする必要がある。春や秋など日中に雪が溶け、水分を含んだ状態で夜間に冷えることで硬まることもあるが、気温の低い冬には人工的に水を入れる必要がある。水を撒く方法は大きく分けて2つ、直撒きとインジェクションがある。直撒きではホースから直接水を撒く方法で、雪の上から水を入れていく。

直撒きは簡易的で少人数でも作業が可能なうえ多くの水を撒くことができるが、デメリットは深くまで水が入らないことである。大量の水を撒くことで深くまで水を入れることは可能ではあるが、水の量が多くなりすぎて表面が氷そのものになりやすい。氷のようにツルツルとした状態でのレースはあまりなく、スキーのグリップの限界を超えないように注意する必要がある。乾いた新雪が降った後に広範囲に水を撒く、あるいはもう少しだけ水を入れたいといった細かい調整をする場合、そして人数が少ない場合によく用いられる方法である。

インジェクションは鉄製のパイプに一列に穴を開けた器具（写真2参照）を使って水を入れる方法である。ホースを端に繋ぎ水を入れると雪面に向かって水が勢いよく噴射される。そのため深いところまで水が入り、硬い層を作ることができる。多くのワールドカップではこの方法が採用されているが、ある程度の人数が必要になる上にパイプの長さの範囲にしか水を入れることができないため、コース全体に



写真1 直撒きの様子



写真2 インジェクションの様子



インジェクションをするには数台の器具が必要になる。また、乾いた柔らかい雪の上では絶対的な水の量が足りず、効果は低い。そのため、作業人数が十分におり、かつ人工雪やしっかりと圧雪されたある程度コンパクトな雪質に対して用いられる方法である。

この2つの手法を状況に応じて選択し、目的に沿った硬さにコースを仕上げていることがコーチの重要な役割のひとつである。

3) コースセット

現在のワールドカップシーンでは多様なコースがセットされている。年々新しいコースセットやコンビネーションが生まれ、難易度も上がってきている。ÖSVでは毎年各地で行われるワールドカップの旗門インターバルやセットの内容を記録しており、レース前の対策に役立てることができる。また、シーズンを通してÖSVのコーチがセットするレースが3回ほどあり、事前に独自のコンビネーションを練習し、経験値の面で優位な状態でレースに臨むといった戦略をとることができる。

実際のトレーニングではコースセッターを交代で担当し、同じような傾向のセットでの練習が続かないように工夫している。また、旗門インターバルは常に計測し、選手と共有することでレースの際に測定したインターバルを自身の経験や感覚と照らし合わせやすくなる。

4) コーチング

トレーニングを始める前にコンセプトを決め、そのためのコースセットをし、選手とトレーニングの目的を共有する。そして1日のトレーニングの中で小さなゴールを決め、目標をもってトレーニングに取り組むように選手を促す。トレーニング中に撮った映像はタブレットに取り込み、滑走タイムはインターネット上で随時確認できるシステムを導入している。コーチは選手の滑りを見てコーチングを行うが、タイムと映像を確認することでより確実なコーチングに繋がる。

5) 分析

アルペンスキーにおいて、分析が可能な要素は多くなく、タイムと映像で分析することが重要になってくる。タイム以外に数値化できるものがなく、きちんとした動作解析も可能ではあるが、時間がかかり作業も手間であるため現場には適しておらず動作や滑走ライン、スキーの角度などはビデオで見て判断するしかできないのが現状である。そのためトレーニング後にはビデオを見ながらタイムと照らし合わせ、どのパートでタイムをロスしているのか、タイムが速い選手と遅い選手での違い、

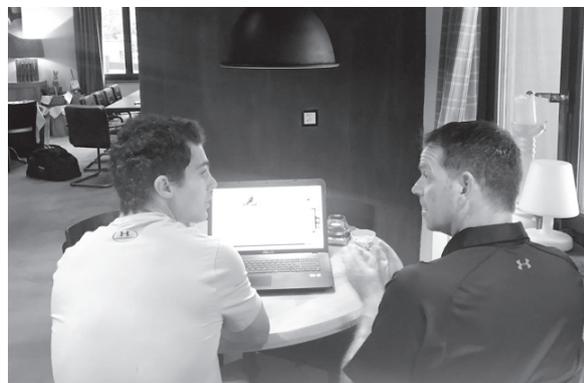


写真3 ビデオミーティングの様子

スキーの種類による違いなどの分析を行う。ワールドカップになると多くの中間計時が設けられるため、細かいパートでの分析も可能になる。

6) コミュニケーション

チームにはコーチ以外にコンディショニングトレーナー、フィジオ、サービスマンなど、多くのチームスタッフが存在する。アルペンスキー競技では多くの要素が複雑に関係し、フィジカルはもちろん、スキーやブーツなどのマテリアルもパフォーマンスに大きな影響を与える。そのためそれぞれの役割をそれぞれの専門家が行うが、全体を取りまとめるのがコーチの仕事である。トレーニングの内容や計画はコーチが決定するが、その際にトレーナーやフィジオと選手の疲労度やフィジカルレベルなどの情報を共有する必要がある。同様に選手の滑りを分析する際にはマテリアルの情報が必要になるため、ビデオミーティングの際にはサービスマンが同席することも多く、技術的な観点とマテリアルの観点から意見交換をし、技術向上のために話し合いを重ねる。このようにコーチはチームスタッフの中心に立ち、各専門家との連携を図る。

④オーストリアでのアルペンスキーコーチ資格

アルペンスキーのコーチ資格はDから始まり最上位のAまで存在する。それぞれの資格をとるためにはまずテストをクリアし、その後コースを受講、そして最終試験に合格する必要がある。Dトレーナーを取得するとCトレーナーに進むことができる。BトレーナーやAトレーナーの受講には、いずれかの国での代表チームにおけるコーチ経験などが必要になる。



写真4 トレーナーコース座学の様子

トレーナー受講の流れは以下

1) テスト

GSゲートでの滑走、整地での総合滑走、不整地での総合滑走を総合して判断

2) コース受講

3～10日で構成されるコースを年4回受講し、雪上での実技、陸上でのコンディショニング実技、そして座学を行う。

3) First AID取得及び、州選抜以上のレベルのチームで5日間以上の実習

それぞれの証明書をアップロードし、最終試験に進むことができる。

4) 最終試験

筆記試験及び、雪上実技、陸上での指導演習テストが行われる。

トレーナー制度は BSPA（日本でいう日本スポーツ協会）により実施されており、受講にかかる費用は教材費のみとなっている。講師は各州のスキー連盟の教官の資格保持者や、理論の講義には大学教授や専門家が講師として招かれる。座学の内容はスポーツ科学を幅広く学ぶことができるものとなっており、解剖学や生理学を始め心理学や倫理まで多岐にわたる。こういった知識をジュニア世代の指導をするコーチが資格を通して学ぶことで、トップレベルだけではなく各地域の選手にも科学的根拠のある指導が可能になる。特にジュニア世代の選手は、コンディショニングに関して専門家ではなくスキーコーチから指導を受けることが多いが、そういった場合でもある程度トレーナーコースで学んだコーチが指導することで体作りの部分でも効果が上がると考えられる。



写真5 トレーナーコース実技の様子

日本では、アルペンスキーコーチ資格がいま現在では無いため、それぞれのコーチの能力によって指導のクオリティにばらつきがあることが現状である。仕方がないのだが、コーチ資格があり、充実した内容の講習を全てのコーチが受けることができるようになれば一定レベル以上の指導がなされ、日本選手のレベルの底上げに繋がると考えられる。今後、世界に進出するような選手を継続的に輩出するためにはコーチ資格の整備は大きな課題になってくる。

⑤ÖSVにおけるスポーツ科学の応用

ÖSVはインスブルック大学などの研究機関と提携することで、科学的な分野からも選手のサポートを行っている。全世界でスポーツ分野における研究が進んでいる中、スポーツ科学を応用していくことは絶対に必要なことであり、進んで行っているのが強豪国である。実際にアルペンスキーにおける論文はオーストリアやノルウェーなどのスキー先進国のものが多く、弱小国との差は開くばかりなのが現状である。オーストリアが行っている活動例を紹介する。

1) 映像分析

インスブルック大学が独自に開発した映像再生ソフトのライセンスが全てのコーチに与えられており、コーチはそのソフトを使用して日頃から分析を行っている。ソフト自体はシンプルで動作は軽く、しかしながら各倍速での再生が可能で、同時に映像からタイムを計測することも可能になっている。2画面再生も可能なので複数選手の比較をしつつ、各パートでのタイムを計測し比較することも可能になる。



このソフトの開発にÖSVも協力しており、現場での使いやすさが考慮されている。また、インスブルック大学が所有するハイスピードカメラをスタッフとともに貸し出すことで、より高度な分析をすることが可能になる。ハイスピードカメラで撮影した映像の解析を依頼することでバイオメカニクスの専門家から助言をもらうこともある。

2) レーシングスーツ開発

アルペンスキーで使用されるレーシングスーツは空気抵抗をいかに少なくするかが重要である。特にスピード系種目においては勝敗を左右する要因になる。インスブルック大学では空気抵抗に対する実験が継続的に行われており、公式ウェアサプライヤーと協力しながらより速いレーシングスーツの開発を行っている。

3) 体力測定

選手の体力測定は、日本を含む各国が必ず行なっているものである。ÖSVの体力測定はインスブルック大学のアルペンスキー研究を行う研究者たちが実施しており、通常の測定に加えて研究のための測定も適宜行われる。すなわちÖSVアスリートが被験者としてインスブルック大学の研究にも協力していて、研究成果がアスリートに還元されるというサイクルができています。日本ではスキーに対する研究が進んでいない上に、スキー連盟と研究機関のつながりも希薄である。今後は少ないスキー研究を行っている研究者には積極的に協力し、科学的な面でのサポートも進めていく必要があると考える。

4) 怪我に関する研究

アルペンスキーは傷害率の高いスポーツの1つである。よって傷害予防は非常に重要な分野になってくる。ÖSV専属のドクターはインスブルック大学の研究にも協力しており、医療機関と研究機関、そして競技団体であるÖSVが連携して競技復帰までのサポートと併せて研究を行っている。結果としてアルペンスキーにおける傷害の研究が進んでおり、世界に向けて予防法なども発信する立場になっている。日本でも各機関と連携して傷害予防への取り組みはより重要視していくべきである。

⑥他強豪国の強化方法

スイスやノルウェーなどの強豪国を見てみるといくつか共通点が見えてくる。1つ目はスタッフ陣が長期にわたり強化に取り組んでいる点である。これは長期計画のもとしっかり強化を進めているという部分と、選手との信頼関係を築き上げてチーム自体が長く続くという2つの良い面があると考えられる。よって強化のためには長期的な計画を立てた上で選手との信頼関係を築き計画を実行していくことが必要になり、それを実行できているチームの選手がまとまって上位にいるのが現状である。そこに追いつくのは選手1人に対してスタッフが多く存在するプライベートチームであるが、男子の場合その数は多くない。チーム全体のレベルが上がり、チーム内での競争がさら



に選手のレベルを引き上げることで複数の選手が同時に世界のトップに上がっていく。こうしたチームビルディングが成功しているのが現在の強豪国であり、そうではない国との差は大きい。

2つ目はスタッフが充実していることである。単純に強豪国で資金が潤沢なのは間違いがないが、スキーコーチはもちろんトレーナーなどのメディカルスタッフ、そしてマーケティングなどスタッフの種類は多岐にわたる。これにより役割分担が可能になり、選手はもちろん他のスタッフもそれぞれの仕事に集中することが可能になる。

（4）研修成果の活用計画

日本のアルペンスキーは好成績を残してきた過去もあるが、いずれも長くは続かなかった。この現状を打破するためには30年間世界一を維持してきたオーストリアから学んだことを基に改革をしていく必要がある。それは連盟の強化体制だけでなく、コーチ資格の整備も進めトップ選手と各地域のジュニア選手など全体に対する指導の質を向上し、日本全体の底上げをしていくことが必須であると考え。日本代表に入ってきた選手のための強化をしている限り継続的な選手の輩出には繋がらず、各地域へのテコ入れも連盟主体で行っていくことが重要になるのではないだろうか。そのために上記したコーチ制度の充実を始め、日本全体の指導者が学ぶ機会を増やしていくような事業に参加していきたい。そして日本代表の強化に携わり、長期強化プランを作成しÖSVで学んだ組織論を提唱していきたい。また、本研修を通して身に付けた語学力とコネクションを生かしオーストリアをはじめとするヨーロッパでのトレーニング拠点の開拓を積極的に進め、日本人選手のトレーニング環境の整備にも尽力していきたい。世界一のチームに帯同し、この目で見えてきたことを伝え、実際に正規のスタッフとして活動した経験をどう活かすか、日本という環境と日本人の特性にどうフィットさせるか引き続き考え、行動していきたい。

（5）その他

アルペンスキー大国であるオーストリアでの研修を通じて、アルペンスキーというスポーツへの見方が大きく変わった。メディアの注目度、スキー場の協力、代表から学校そして地域に至るまで全てのチームの取り組み、いずれも想像を超えるもので生活や文化にスキーというものが根付いているのだと強く感じた。こうした背景にはアルプスに囲まれた地理的要因、スキーを中心とした盛んな冬季観光産業、スキー場のリフトなどを製造するオーストリアきっての大企業、そして世界へ輸出しているスキーメーカーなど、スキーを通して雇用を生み経済に貢献し、国を支えているという事実がある。これこそがスキーを取り巻くオーストリアの環境であり、スキースポーツへの投資にも繋がっている。日本のスキースポーツを強くしていくためには強化活動だけでなく、様々な取り組みが必要になるが、自然資源が豊富な日本にはポテンシャルを感じたのも事実である。こうした機会を手にすることができたのは日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、全日本スキー連盟、そして研修を快く受け入れてくれたÖSVをはじめとするオーストリアの関係者のおかげである。改めて関係者の皆様に感謝を申し上げ、研修の報告とする。

研修員報告

〈スケート／スピードスケート 小原 英志〉



平成30年度・長期派遣（スケート／スピードスケート）



I. 研修題目

- カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得
- カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査
- カナダにおけるコーチ養成システムの調査

II. 研修期間

2018年8月10日 - 2020年8月9日

III. 研修地及び日程

(1) 主な研修先

CANADA : Calgary
 Oval Elite Athlete Pathway Program
 Speed skate Canada Long track Ladies National team
 Canada Sport Institute Calgary

(2) 主な受入関係者

Marcel Lacroix (Associate Director, Sport)
 Arno Hoogveld (Coach, LT Stage 3)
 Jeff Kitura (Coach, LT Stage 3)
 Justin Warsylewicz (Coach, LT Stage 2)
 Shawn Holman (Speed Skating Canada director)
 Remmelt Eldering (Speed Skating Canada Long track Ladies All Round Team
 Head Coach)
 Jason Sjostrom (CSI Advanced Coaching Diploma mentor)
 Darcy Cumming (CSI Advanced Coaching Diploma mentor)

(3) 研修日程

2018年8月10日 - 2019年4月30日 Oval Elite Athlete Pathway Program
 2019年5月1日 - 2020年8月9日 Speed skate Canada Long track Ladies National
 team
 2019年4月1日 - 2020年8月9日 Canada Sport Institute Calgary (コーチングラ
 イセンスAdvanced Coaching Diploma取得)

Ⅳ. 研修概要

(1) 研修方法

カナダのスピードスケート強化の中心となるOlympic Oval（カルガリー）を拠点とし、スピードスケートにおけるカナダのコーチング技術を学ぶ。Speed Skating Canadaの協力を得て、ナショナルチームやオーバルパスウェイにおけるコーチングを実地研修する。また、カナダのコーチ養成を担うCanadian Sport Institute CalgaryのコーチングライセンスAdvanced Coaching Diplomaを受講し、カナダにおけるコーチ養成システムを学ぶ。

(2) 研修報告

①SSC Elite Athlete Pathway

Speed Skating CanadaではSSC Elite Athlete Pathwayと呼ばれる一貫指導システムを持っている。これはカナダ国内の州や準州のスピードスケートの組織と連携して取り込まれており、その中の一つに私が初年度にメインで帯同したOlympic Oval Elite Pathwayもある。この一環指導システムではSpeed Skating CanadaとOlympic ovalが共同で設計したプログラム、サービスから成り立っている。このプログラムの目的はSSC Long Term Athlete and Player Development Frameworkに準じて、競技レベルが同水準に位置するアスリートごとにグループ分けし、様々なレベルのアスリートをトップレベルに達するまで明確な道標を示し、ゴールに進めることを目的とする。

SSC Elite Athlete Pathwayはステージ1からステージ5までで構成されており、ステージ1は州や準州でのクラブチーム、ステージ2-3まではOval Pathwayに所属し、ステージ4-5はSpeed skating Canadaに所属する。ステージ3とステージ4の間にはNEO-Senior & Senior Development Poolがあり、ここでOval PathwayとSpeed Skating Canadaのナショナルチームとの連携を持っている。毎年シーズンの終わった4月にはOval PathwayとSpeed Skating Canadaで選考会議を持ち、各プールの選手を、選考条件をベースに選考していく。この選考グループはPathway Management Committeeと呼ばれ、年間を通して決められたミーティングを開催し、組織、選手などの評価を行う。

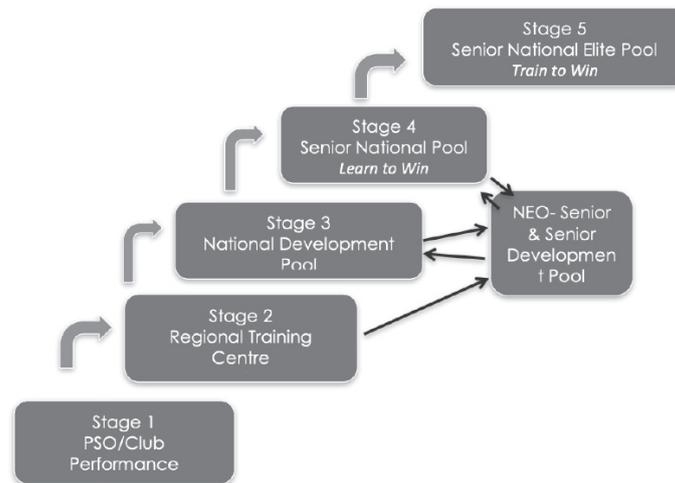
4月末には選考された選手たちに招待状を送り、受け取った選手たちは参加するかどうかを決定して連絡する。自分の希望するステージに招待されず、引退を決める選手たちもいる。招待された選手たちは、ステージや自分の強化指定に応じた活動資金やサポートが提供される。スピードスケートという多大な活動費の必要なスポーツにおいて、次年度に自身がどのランクの指定をもらえるかは選手たちにとっても大きな事の一つと言える。

注目すべきはNEO SENIOR/ SENIOR DEVELOPMENT POOLで、Oval PathwayとNational teamとの連携の肝となっている。ジュニア期を終えシニア期に入る時にシニアの壁に苛まれる選手は多く、ここを乗り越えてシニアで戦って行く力をつけることは選手としての大きな試練でありステップである。日本でも多くのスポーツで、ジュニア期を終えてから伸び悩んで終わってしまったという声はよく耳にする。現在カナダではこのネオシニア世代の強化に大きな意味（価値）があると考えており、ジュ

ニアよりも大きな予算、プランで強化が行われている。個々の強化選手へ配分される強化費からもそれは見て取れ、また世界大会への派遣もジュニアよりもネオシニアの方が積極的に行われている。

以下、SSC Elite Athlete Pathwayの概要説明

The 5 Stages of the SSC Elite Athlete Pathway



1) ステージ1 PTSO/Club programs Train to train

ステージ1は主に15歳未満で、彼らはロングトラックとショートトラックの両方を視野に入れている。州や準州のスピードスケートクラブなどがステージ1の役割を持ち、Speed Skating Canadaのサポートを得ながらプログラムを構成している。ステージ1ではSpeed Skating Canadaからスキル、テクニク、メンタル、フィジカルのカリキュラム、トレーニングガイドラインを提供されており、ステージ2に移行する準備としてそれらのチェックリスト、ベンチマークビデオなども提供される。Speed Skating Canadaはコーチクリニックやコーチ資格の受講機会を提供し、地域のコーチたちと連携しながら、コーチたちのレベルアップを図っている。

ステージ1では有酸素能力の向上や基本的なスケートテクニクを育成し、短距離や長距離といった距離選択は積極的には行わない。また大会結果やパフォーマンスにも焦点は当てず、育成の観点から適切な大会へ出場するようにしている。彼らは当然学校へ通い、スケート以外のスポーツを行うことも推奨されている。15歳から16歳になるまでにはステージ2へ移行できるようにプログラムが設計されており、ステージ1ではトレーニングと競技を楽しむこと、スケートを愛する精神を築き上げていくことを大切に指導されている。ステージ2へ向けて、自身の家から離れたところで暮らすための準備段階にもある。

ステージ1の主なベンチマーク

ー トレーニングボリューム

- 過去1、2年で、年間少なくとも300～400時間のトレーニング





- ・氷上練習を含む、週に5～7回のトレーニングセッション
 - ・氷上以外の夏季のトレーニング
 - ・夏季1週間に2～3回の有酸素セッション
 - ・冬季1週間に1～2回の有酸素セッション
- など。

3) ステージ3 NATIONAL DEVELOPMENT POOL Train to Compete

このステージでは17-21歳が想定され（年齢カテゴリA1、A2、Neol、2、3）、このステージでもエントリー基準タイムが設定されている。コーチとアスリートの比率はおおよそ1：14程度と設定され、コーチは別のステージのコーチと連携し合同でのトレーニングも行われる。Oval Pathwayではこのステージを男女別々のチームで組んでいる。過去には男女混合などでも行われていたが、その時の選手の構成やレベルに応じてより良い形を模索し、現在はこの形に落ち着いている。

私の帯同時には、ステージ3女子チームをJeff Kituraが、男子チームをArno Hoogveldが見ていた。

ステージ3ではスケート技術、フィジカルおよびメンタルスキルの継続的な育成だけでなく、成功するために必要な競争スキルの育成（世界ジュニア/シニアレベル）がされている。Calgary Olympic Ovalで10ヶ月居住したプログラムが求められており、より独立した生活環境への移行が必要となる。テクニク、タクティク、フィジカルおよびメンタルなど総合的に分析され、個々のアスリートに必要なプログラムが検討されている。またステージ2に引き続き、Canada Sport Instituteと連携し、一段ステップアップした教育プログラムが用意されている。

4) ステージ4 Senior National Pool Learn to Win

19歳以上が想定され、コーチとアスリートの比率は1：12程度とされている。このステージはSpeed Skating Canada National TeamとOval Pathwayの中間的な位置にあり、双方がこのステージの責任を持っている。ステージ3と同様にコーチの裁量で短期的なステージ移動やテストが行われる。様々なデータや分析によって、よりハイパフォーマンスなトレーニングが求められ、また日常環境を作り、最高レベルのフィジカルとメンタルを作り、国際大会を目標としている。このステージは過去には独立したグループが形成されていたが、現在はナショナルチームとほぼ併合されたチームが試みられている。

5) ステージ5 SENIOR NATIONAL ELITE POOL Train to Win

このステージは国際大会選考基準を満たし世界大会へ出場した選手に限定され、さらには世界大会でトップ8に入る可能性が高い者が選ばれる（オリンピック、世界選手権、ワールドカップ）。招待を受託したものはSpeed Skating Canadaのアスリートとして契約署名している。他のステージと同様、コーチの裁量で他のステージへの移動や合同練習が行われる。トレーニンググループにおけるコーチ:アスリートの比率は1：8程度とされ、アスリートはフルタイムでロングトラックスピード

スケートに完全に集中することが期待される（コーチが望まない限り他のスポーツに取り組むことはない）。フィジカル、メンタルともにピークに達し、また最高のレースができるよう戦術、スキルを磨く。

6) NEO SENIOR/ SENIOR DEVELOPMENT POOL

このステージは19歳から25歳程度を想定され、Oval Pathway（ジュニア期）と National Team（シニア期）の橋渡しの役割を担い、ジュニアからシニアへの移行期（ネオシニア世代）として重要なプールに位置付けられており、カナダでは前述の通りこのカテゴリの強化に現在とても力を入れている。

②safety Sport

カナダでは安全にスポーツが行える環境を作る取り組みを、積極的に行っていると感じる。写真にあるように、カナダでは小学生以下のスケーターはヘルメット、ゴーグル、手袋の着用は義務で、さらに下の年代は肘・膝のガードもつける。何かあればすぐに訴えられる国だけに、スポーツ施設やスポーツ団体、クラブでは安全対策が非常に入念に取り組まれていると感じる。またスポーツ団体としてスポーツの安全に対する検討会なども積極的に開催されている。

スピードスケートの競技レベルは、用具の変化、トレーニングの近代化、アイスリンクの高速化によってどんどん上がっており、それはよりリスクのあるスポーツへと移り変わっていることを意味する。十数年前であれば、表面もそんなに平らではなく、運動靴でも氷の上を走れそうな湖アイスリンクでスケートが行われ、転んでもアイスリンクの途中で止まってしまうことすらある時代から、今では小学生がその当時のシニア世代のタイムで滑る時代へと時は流れている。

日本での安全対策はまだまだ世界を追いかける状況にあると感じた。スケートリンク一つを運営することは、私たちの想像以上に多大なコストがかかり、日本のスケートリンクの多くは非常に厳しい財政状況にある。その中で安全に対する設備やマンパワーを確保することは容易でないことは私も承知している。しかし、そんな状況の中





でも検討し、前進して行くことが必要であると私は感じた。

また、施設ではなく、選手自身の安全に対する意識、また組織の教育も必要であると感じる。電車にはきちんと列を作って並ぶ日本人に感激する外国人がいる一方で、スキー場でのヘルメットの装着率、自転車のヘルメットの着用率、自動車の後部座席でのシートベルト着用率などの低さは、組織のルールや教育の影響が大きいと思う。カナダではいずれも装着するのが当たり前の価値観にある。この辺りの組織の教育や役割は大きいと思う。

International Skating Union (ISU) でも安全に対する国際大会ルールは都度更新されていくが、安全に対するルールは今後も時代とともにどんどん変化して行く。

③クラブチーム

ステージ1に属するクラブチームはカナダ全域にあり、チームへ入るには当然費用がかかる。ただし、チームの多くは運営が容易ではなく、多くのチームがラッフルチケットで運営資金を調達している。ラッフルチケットとはチャリティー福引のことで、1枚\$15や\$30で販売し、抽選に当選すれば素敵な商品がもらえるシステムである。

募金に近いシステムだが、そこには当選すれば\$1,500分の飛行機チケットがもらえるような、ささいな夢もある。保護者には、所属するチームから、このチケットを何枚以上売ってください、というようなノルマが課せられていることもあり、この販売時期が毎年負担になっているとある保護者が教えてくれた。私も協力させていただいたが、\$1,500航空チケットの当選連絡はもちろんこなかった。売ることが精神的負担な保護者は自分で購入している人も結構いると聞いた。

日本でも多くのスポーツ団体が募金を募っているが、このようなちょっとしたドリームを付加するだけでも募金をする人の数や募金する人たちの気持ちは変わるのではないかと感じた。現在、日本にしっかりとお金を徴収して運営できているスケートクラブは僅かであり、多くのチームがボランティアベースで支えられている。マイナースポーツの宿命ともいえるが、競技の普及活動は今後も色々なことを検討していかなければならない。

カナダでの小学生、中学生世代のクラブチームには多くの大学生世代のコーチで成



り立っているチームがある。彼ら自身もまたスピードスケートの選手である場合が多い。カルガリーの高校生以上のスケート選手はおよそ2割程度が地元出身で、残りは他の地域から越境でスケートをしにカルガリーへ来ている。彼らは大抵、一軒家を数名で借りて共同で暮らしている。シェアリングハウスである。高校生スケート選手はすでに親元から離れて自炊し生活している。多くの選手は小学生のスケートのクラブチームコーチであったり、他のアルバイトをしながら競技を続けている。

彼らのお金を得る手段の一つにスケートのコーチがあることはとてもいい循環であると思う。彼らは子供たちをコーチングする事によって自身の選手としてのスキルも間違いなく上がるだろう。

④文化・強み・タフネス

日本のスポーツ界では、小学生時にはすでに勝利至上主義の中にいる場合が多いように思う。小学生ぐらいの時にはより多くのスポーツに触れた方がいいと言われながら、多くのスポーツはより若いうちから一本へ専門化されていっているように感じる。競技特性によってスタートが早ければ早いほどいいスポーツもあれば、そうではないスポーツもある。スケートは通常、前者と言われているが、氷の上で、厚さ1ミリにみえないブレードの上でバランスをとってより早く進む技術を習得するにはとてつもない時間を要することは、誰しもが想像に難しくない。

カナダでのスピードスケートにおいて勝利至上主義という空気はほとんどない。これは教育によるものなのか、はたまた国民性か。

カナダでは全国中学校総体や全国高校総体のような大会がない。彼らのシーズンの目標はシーズン最後の大会で自分のベスト記録を出すことだったり、世界ジュニアの代表だったり、はたまたシリーズ戦であるカナダカップでの成績を積み上げることだったり。そこには日本の青春エネルギーを全て注ぎ込むような大会はない。そんな環境がそうさせる要因の一つかもしれないが、彼らは純粋にスケートを楽しんで伸び伸びと取り組んでいるように思う。そして彼らの多くは、スケートだけが人生というスタイルで競技に取り組んではいない。

彼らの多くはとても勉強熱心で、多くの者が午前と午後のトレーニングの合間にも





教科書やパソコンを開き、遠征のため1時間の移動があれば車のなかでノートを開き、大会の前日でも皆でカフェに集まり勉強をしている。ナショナルチームの選手ですら、資金繰りが難しい選手は、トレーニング後や、トレーニングがない日にアルバイトをする。トレーニングの後に製氷機に乗る選手を日本ではもちろん見たことはないが、彼らの1日は本当にタフであると思う。日本では聞いたことがないが、そんな彼らの環境が、競技を終えてからドクターになる者を作るのかもしれない。

今日、日本のスケート界は資金面に環境面、多くの部分においてとても恵まれていると思う。

より良い環境を作っていくことが大切なのは言うまでもないが、不自由な環境への適応や、突発的なアクシデントへの対応力、など厳しい環境から培われることも多い。

これはそれぞれの国民性であったり、文化、社会が作り上げている部分が大きいのと思うが、カナダの選手はとても思考が柔軟であると思う。この柔軟性は彼らのタフさでもあると私は思う。

カナダの選手はコーチと対等に話をする。そこにはもちろんコーチへのリスペクトもあるが、彼らが自身に責任を持ち、自主性、想像力に長けた選手へと成長する土壌がそこにあると感じた。

日本では古くからのトップダウン形式の文化が未だにあり、実際私自身もカナダの選手の前ではフレンドリーな振る舞いをしているにも関わらず、日本人選手の前に立つと、少なからずとも先生のような振る舞いをしてしまう自身に気づく。

NCAで外国人コーチが口を揃えて同じことを言っていたのを私は心に留めている。日本に来て、日本の文化を受け入れて指導を始めてからうまく回り始めた。これは誰がどこの国へ行ってもそうなのだと思う。どこの国にも長年培った文化や強みがあり、それを受け入れることがその国での指導の最初の一步なのだと私は思う。

日本人の長所を挙げると勤勉性という言葉がよく上げられる。日本人の強みを生かし、さらには自主性、柔軟性、想像力、またタフさを磨くコーチングとはどこにあるのか。私は今後も考え、前進していかなければならないと思っている。

⑤ コーチの役割

日本では通常、一人のコーチが多くの役割を担っているが、カナダでは多くのことが分業化されている。もちろん一番選手の近くにいるコーチは選手の心理面に大きな影響を及ぼし、また大きな役割があるが、Oval Pathwayでは選手の精神面をサイコロジストがサポートする機会が多い。レースにおける緊張との付き合い方だったり、ルーティンだったり、サイコロジストの講義もプログラムとして行われる。サイコロジストがいないようなチームの選手であっても、心に大きな負担を抱えるなどして、彼らのサポートが必要な時には最寄りのサイコロジストのところへ行く。日本のNTCに当たるCanada Sport Instituteに勤務するサイコロジストを訪ねることができる。

カナダでは学校などでもサイコロジストの活躍する場は多く、自身が求めればすぐ身近にサポートしてくれる場がある。日本でも探せば多くの専門的なサポートはあるが、社会全体を見ても、この分野でのスペシャリストの数や環境は満足のいくもので

はないと感じている。また、日本では精神科であったり、メンタル面のサポートに対してネガティブな印象が現在でも少なからずあるが、ここではメンタルのサポートを受けることはごく普通なことであり、コーチもまたサイコロジストを頼り、多くのことを相談する。

日本でもこのような環境を整えることができるチームはまだ僅かであり、特にジュニア期などの組織は依然として、カナダでは5人くらいの専門家で行っていることを、コーチ1人で抱えて行わなければならない環境にある。繊細な心の成長過程にあるジュニアや、さらに下のカテゴリーこそ、このようなサポートが必要ではないかと私は思う。

例えば栄養学にしても、スポーツ栄養学と一般的な栄養学の二つは根本こそ同じであるが、スポーツの中で求められることは、また全く違う枠の中にあり、競技種目によってもそれは違う。

ストレングスの分野にしても、スポーツ栄養の分野にしても、カナダでは、求めればその分野のスペシャリストに身近でサポートを受けられる体制があるが、日本でこの点がかなり不足しているように思う。これらの専門スタッフを増やしていける社会、環境、受け皿は今後の日本の大きな課題の一つであると感じた。

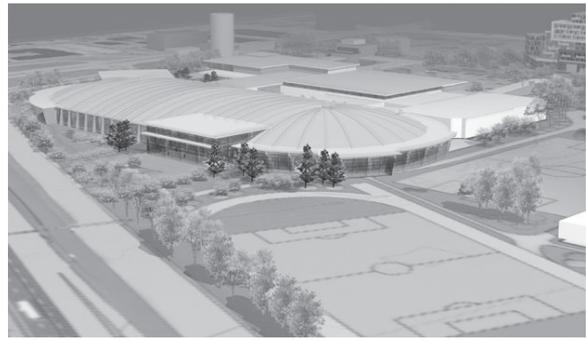
⑥環境・施設

私もカナダに来て驚いたが、カナダには私たちが思っていた以上に400mのアイスリンクが存在する。確かにカナダ人が、ワールドカップでも訪れたことのない日本の地方のアイスリンクや丘リンクがどれほどあるかは想像できないだろう。カルガリーから150kmほど北の町Red Deerはカナダのスーパースター Jeremy Wotherspoonが育った町であり、彼を称えリニューアルした400mアイスリンクがそこにある。

2019/20シーズンにはカナダウインターゲームがそこで盛大に開催された。(カナダウインターゲームは日本で言えば国体のような大会で、4年に1度行われる。州ごとに競い合い、カナダでは非常に大きなスポーツイベントの一つであり、それに出場することもカナダのスポーツ選手にとって名誉なことのひとつとなっている。)



2010年にバンクーバーオリンピックが行われたブリティッシュコロンビア州のFort Saint Johnには、バンクーバーオリンピック後に室内アイスリンクが作られ、1階にはアイスホッケーリンク、2階にスピードスケートの400mリンク、3階にランニングトラックがあり、造りは非常にコンパクトで、ランニングコストを限りなく抑える近代的な設計となっている。日本の室内アイスリンクの多くは非常に大きなランニングコストがかかる。オランダのアイスリンクにも見られるが、低ランニングコストのアイスリンクは今後さらにスタンダードになっていくであろうし、日本の地方アイスリンクにも生き残る可能性を見出せるチャンスがそこにはある。



アルバータ州の東隣、サスカチュワン州も屋外のアイスリンクがあり、多くの有名スケート選手を輩出している。さらに東のマニトバ州Winnipegもスケートが盛んな街として有名である。もう一つ東隣のケベック州ではショートトラックが盛んに行われており、カナダのショートトラック人口の大部分を占めている。

ケベック州にも屋外の400mアイスリンクがあり、多くの世界チャンピオンを輩出している。ケベック州では現在新しい屋内の400mアイスリンクが建設中であり、2020/21シーズンに完成予定であったが、COVID-19の影響で工事が中断し、完成が遅れている。ケベック州にはもともと多くのショートトラック選手がおり、ロングトラック（400m）で行われるスピードスケートと2足の草鞋を履いている選手も多く存在する。またショートトラックからロングトラックへスイッチする選手も多くいる。

競技としての土壌はカルガリーよりもはるかに大きく、400mアイスリンクが完成すればケベックのスケート競技はより活性化されると言われている。現在カナダのスピードスケートにおけるNTCはカルガリーにあるが、カルガリーの経済が衰退してきていると言われており、ケベックに400mアイスリンクが完成すれば、NTC拠点がケベックへ移動する可能性があるとも言われている。

⑦ケベックのスピードスケート選手

現在ケベックでは、旧屋外アイスリンク跡地に新しいアイスリンクを建設しているために、シーズンに入ってもケベックのスケート選手は400mのアイスリンクでトレーニングが行えない状況にある。現在、彼らは夏期からほぼ通年を通してショートトラックで氷上トレーニングを行っており、定期的にカルガリーの400mアイスリンクにキャンプへ訪れる。大会シーズンに入っても400mのアイスリンクで常時トレーニングを





⑨選考基準

Speed Skating Canadaの国際大会派遣選手の選考要項は数十ページに及ぶ。カナダ人コーチに聞いたところ、選考に対して訴えられる可能性を限りなく排除するため、あらゆることが細かく記述されているようだ。近年のカナダの選考基準は日本のものと同様によく似ている。ある適正な選考基準が模範となり、世界的に選考基準が似通っているように思う。ワールドカップの代表は、世界ランクの高い種目から順に選考されるようになっており、前年度の世界距離別選手権で3位以内に入った選手は内定される。今年に限って言えば、昨シーズンにカナダは合計9個のメダルを獲得しており、今までの選考基準と同等な基準が設けられれば、2020シーズンは多くの内定者がいることになるが、今年の内定基準がどうなるかは興味深い。マススタートの選考基準についてはカナダもその年ごとによって変わっているようで、より良い選手を選考するための試行錯誤が窺える。

カナダでは数年前から、選考会では強化選手が転倒等のアクシデントに見舞われた際に、再レースを行えるルールを採用している。これはオリンピック選考会でも同じである。昨冬にもJordan BELCHOSがワールドカップ後半戦の代表選考会で転倒して再レースを行った。これは単独での転倒だったとしても適用される。力のある選手の救済方法はどこの国でも課題であり、難しい問題である。

⑩ハラスメントと文化

多くの移民を受け入れ、多種多様な人種、民族が住んでいるカナダでは他の国よりもそれらに対する差別などが少ないと聞く。実際に私自身も感じたことであり、カナダに住む人々の優しさ、心の広さには私も何度も助けられた。これは体型や容姿に対しても同じで、スポーツの世界でウエイトコントロール一つについても、発言にはとても気を使う。あらゆる人にリスペクトを払う彼らの姿勢から私が学んだことは多い。日本で妊婦やベビーカーを押した人が、公共の移動手段を利用するときに心配するようなストレスはここにはなく、むしろ社会全体を通してそういう人々を助ける精神がある。

⑪カナダのコーチライセンス

私が今回受講したコーチライセンスはAdvanced Coaching Diplomaと呼ばれ、元々はLevel 1 - 5まで設定されていたもののLevel 4に当たる。通常ではいきなりLevel 4を取得することはできないが、それまでのコーチング経歴などによって飛び級受講が可能だ。

私は過去の経歴とSpeed skating CanadaとOlympic Ovalの推薦をいただき、受講することが可能となった。Level 4は国際大会で活躍するNational coachレベルでAdvanced Coaching Diplomaは通常2年間かけて、3時間の講義をトータル約100回行う。カリキュラムは以下でそれぞれのカテゴリーの専門的な知識を学ぶ。

受講料は、カナダ人は\$4,000、International studentは\$12,000程度とされている。

年に2回ほど4日間の集中キャンプが行われ、そこでチームビルディングも行われる。1年終了時にMid point presentation（30分程度）と呼ばれるプレゼン試験が行

CANADIAN SPORT INSTITUTE – ADVANCED COACHING DIPLOMA		coach.ca			
SEMESTER 1		SEMESTER 2			
TC – Training and Competition Readiness	<ul style="list-style-type: none"> TCM1 Health & Safety (4 units - 12 hrs) <ul style="list-style-type: none"> TCM1U01 Risk Management TCM1U02 Injury Prevention TCM1U03 Injury Prevention Strategies TCM1U04 Doping Testing & Dilemmas 	<ul style="list-style-type: none"> TCM2 Athlete Identification & Selection (3 units - 9 hrs) <ul style="list-style-type: none"> TCM2U01 Principles and Approaches to Athlete ID and Selection TCM2U02 Identifying Policies and Practices TCM2U03 Applying Testing and Selection Procedures 	<ul style="list-style-type: none"> TCM3 Preparing for Competition (7 units - 21 hrs) <ul style="list-style-type: none"> TCM3U01 Enhancing Mental Competition Readiness TCM3U02 Pre-Competition & Competition Strategies TCM3U03 Debriefing Athlete Performance TCM3U04 Environmental Factors TCM3U05 Environmental Impacts on Performance TCM3U06 Eating for Competition TCM3U07 Nutritional Practices for Competition 	<ul style="list-style-type: none"> TCM4 Strategic Planning for Training & Competition (5 units - 15 hrs) <ul style="list-style-type: none"> TCM4U01 Strategic Planning for Major Events TCM4U02 Creating an Event Plan Through Collaboration TCM4U03 Funding and Resourcing the Event TCM4U04 Building & Using a Support Team TCM4U05 Presenting the Event Plan 	
	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	
	LE – Coaching Leadership	<ul style="list-style-type: none"> LEM1 Effective Leadership Behaviour (4 units - 12 hrs) <ul style="list-style-type: none"> LEM1U01 Assessing Leadership Effectiveness LEM1U02 Enhancing Leadership Effectiveness LEM1U03 Self and Stress Management LEM1U04 Personal Improvement Planning 	<ul style="list-style-type: none"> LEM3 Living Your Coaching Philosophy (3 units - 9 hrs) <ul style="list-style-type: none"> LEM3U01 Values Based Decision Making LEM3U02 Codes of Conduct LEM3U03 Values Based Conflict 	<ul style="list-style-type: none"> LEM5 Building Effective Teams (5 units - 15 hrs) <ul style="list-style-type: none"> LEM5U01 Building Effective Team Culture LEM5U02 Planning Team Building Activities LEM5U03 Collaborative Decision Making LEM5U04 Problem Solving in Groups LEM5U05 Team Dysfunction 	<ul style="list-style-type: none"> LEM6 Leading a Program (6 units - 18 hrs) <ul style="list-style-type: none"> LEM6U01 Determining Roles and Responsibilities LEM6U02 Managing Staff Performance LEM6U03 Performance Review LEM6U04 Effective Communication and Communication Tools LEM6U05 Developing Power and Influence LEM6U06 Advocating for Change
		RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT
	PP – Performance Planning	<ul style="list-style-type: none"> PPM1 Profiling Sport Performance (9 units - 27 hrs) <ul style="list-style-type: none"> PPM1U01 Profiling Sport Using LTAD PPM1U02 Understanding Foundations of Sport Physiology PPM1U03 Assessing Physiological Factors in Sport PPM1U04 Assessing Nutrition for Sport Performance PPM1U05 Assessing Mental Demands in Sport PPM1U06 Optimizing Physical Abilities for Performance PPM1U07 Testing and Monitoring Physical Abilities PPM1U08 Sharing Nutritional Considerations PPM1U09 Identifying Mental Factors Impacting Performance 	<ul style="list-style-type: none"> PPM2 Developing Integrated Training Plans (6 units - 18 hrs) <ul style="list-style-type: none"> PPM2U01 Planning Theory PPM2U02 Planning for Prehabilitation PPM2U03 Real World Training PPM2U04 Creating the Yearly Plan PPM2U05 Developing Conditioning Programs PPM2U06 Planning Microcycles 	<ul style="list-style-type: none"> PPM3 Detailing the Training Plan (5 units - 15 hrs) <ul style="list-style-type: none"> PPM3U01 Detailed Review of Physical Preparation Plan 1 PPM3U02 Detailed Review of Physical Preparation Plan 2 PPM3U03 Reviewing the Recovery Plan PPM3U04 Reviewing the Taper Plan PPM3U05 Debriefing the Planning Process 	<ul style="list-style-type: none"> PPM4 Managing the Training Plan (Mentoring) (4 units - 12 hrs) <ul style="list-style-type: none"> PPM4U01 Working with Mentor 1 PPM4U02 Working with Mentor 2 PPM4U03 Working with Mentor 3 PPM4U04 Working with Mentor 4
RUBRIC ASSESSMENT		RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	
EF – Coaching Effectiveness	<ul style="list-style-type: none"> EFM1 Teaching That Enables Learning (4 units - 12 hrs) <ul style="list-style-type: none"> EFM1U01 Motor Learning Principles Part 1 EFM1U02 Learning & Intervention EFM1U03 Planning Effective Practices EFM1U04 Performance Technology & Video Analysis Systems 	<ul style="list-style-type: none"> EFM2 Analyzing & Developing Skill (5 units - 15 hrs) <ul style="list-style-type: none"> EFM2U01 Biomechanics Theory to Practice EFM2U02 Correcting Performance EFM2U03 Motor Learning Part 2 EFM2U04 Developing Decision Making Practices EFM2U05 Integrating Innovation into Practices Part 1 	<ul style="list-style-type: none"> EFM3 Quantifying & Monitoring Performance (4 units - 12 hrs) <ul style="list-style-type: none"> EFM3U01 Analyzing Movement & Force EFM3U02 Performance Analysis in Competition EFM3U03 Using Notational Analysis in Competition EFM3U04 Statistical Analysis of Performance 	<ul style="list-style-type: none"> EFM4 Demonstrating Coaching Effectiveness (4 units - 12 hours) <ul style="list-style-type: none"> EFM4U01 Demonstrating Skill Analysis & Corrections (2 classes) EFM4U02 Demonstrating Practices that Enhance Decision Making (2 classes) 	
	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	RUBRIC ASSESSMENT	

われ、2年間の終了時に最終のFinal presentation（1時間程度）が行われる。

講義は知識学習と、ディスカッションを常に繰り返しながら進められる。講師と学習者の距離が非常に近く、講師も生徒と一緒にディスカッションしながら知識を深めていく感がある。日本のような、教壇の上に講師が立ち淡々と進められていく感じではない。

英語が未熟である私にとっては週に1回のこの時間が本当に試練であったが、まわりの温かなコーホートのサポートによって毎回乗り越えることが出来た。特にコロナウイルスによってオンラインでの講義に切り替わってからは、私にとって本当にタフなものであった。コーチライセンスシステムは定期的により良いものへとリニューアルされており、これだけのシステムを作るには大きな時間、費用が必要であったことが窺える。

⑫ コロナ禍

まだCOVID-19が他の国の出来事であった2020年3月初旬、オーバルファイナルの中止がアナウンスされた。既にノルウェーなどいくつかの国がカルガリーへオーバルファイナルに出場するために来ていたが、もちろん彼らはすぐさま帰国することとなった。3月10日、ワールドカップファイナルから帰国した選手はオーバルでトレーニングを開始していたが、次の日には2週間の自己隔離命令が出て、彼らは2週間の自己隔離となった。

オーバルファイナルが中止と決まった当初、国内競技会は開催される予定であっ



カナダコーチランセンズの同期メンバー

たが、カナダカップなどの国内大会もその後、中止となり、12日にはSpeed Skating Canada（カナダの連盟）とOlympic Ovalからトレーニングを含め全ての集団活動の禁止がアナウンスされた。11日までは通常通りの光景がオーバルにあったが、多くの国内選手も目標としていた大会のキャンセルと共に、皆で顔を合わせることもなく、突如シーズン終了となった。

カナダでのCOVID-19の感染者は3月11日時点ではまだ20人程度と少なかったにも関わらず、カナダ国、それぞれのガバメント、各団体の対応はとても早かったように思う。その後すぐに不要不急の外出が制限され、お店の入場制限など多くのガイドラインが設定された。（ガイドライン、ソーシャルディスタンスが保てなかった場合は10万円近い罰金。）この迅速な対応がなければ、カナダも今頃アメリカやイタリアと同じぐらい感染者が爆発していた可能性が高いと言われている。

カナダと日本では組織の構造、人数、決定されるまでの過程、決定権者の所在に大きく違いがあると感じた。日本での多くの組織はトップダウンでありながらも、組織長の決定には非常に多くのステップがあり、決断に時間がかかるように思う。カナダでは個人それぞれの責任が大きいとともに、緊急状況時の決定権者の決断が非常に早いと感じた。

カナダではどんな小規模な団体や組織、また合宿などにおいて、緊急事態が発生した際のマニュアルがしっかりと書面化されている。

日本、カナダ、どちらにも尊重する歴史、また長所があり、適した場面があると思うが、今回のコロナ禍によって私がカナダで見たものは、私の今後の指導、組織作りとっても非常に学びの場となった。





カナダ代表チーム

(3) まとめ

カナダから帰国し、私の何が一番変わったのか考えてみた。もちろん現場では彼らのコーチングやフィロソフィーを学ばせていただき、CSIでのコーチングライセンスクラス（Advanced Coaching Diploma）では本当に多くの新しい知識を学ぶことが出来た。

カナダのOval Pathwayではカルガリー大学オリンピックオーバルという一つの会社に入れていただき、経営、組織を間近で見せていただいた。

そんな中で、私の中で一番財産となったこと、変化したことは、人間の中身、考え方、価値観ではないかと思う。

私がこの2年間で得たカナダのスケート関係者、またカナダ国民の温かさ、彼らとの繋がりは私の1番の財産となり、今後の私の人生を大きく変えてくれたと思う。コロナウイルスの影響で、外出制限がかかる中で、関わっていただいたすべての方に直接挨拶をしてから帰国できなかったことが私の1番の心残りである。

2年という濃密な時間を過ごし、私は大きな寂しさと共に帰国した。今回このような機会を与えていただいた事により、私が出たものは日本では決して得ることのできないものであり、ご尽力いただいた関係団体、関係者の皆さまには重ね重ね感謝したい。今後、この経験を日本で生かし日本のスポーツ界のために活動していくと共に、カナダ、日本、双方の国のスケート界のより良い発展に貢献していければと思う。

スポーツ指導者海外研修事業実施要項

1. 趣旨

本会加盟団体に所属している新進気鋭の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員（以下「海外研修員」という）として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者を育成する。

2. 海外研修員の種類と研修期間

- (1) 海外研修員は長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）とする。
- (2) 海外研修員は、原則として1ヶ所において集中的に研修するものとする。

3. 海外研修員としての条件

海外研修員は、次の条件を全て満たしている者でなければならない。

- (1) 研修先の受け入れの保証があること。
- (2) 勤務先等の所属長より本研修の承諾を受けていること。
- (3) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること。
- (4) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること。
- (5) 原則、帰国後、本会の強化スタッフまたは競技団体における指導者として活動できること。

4. 海外研修員の募集人数

募集人数については、若干名。

5. 海外研修員候補者の選考

- (1) 本会は本会ならびに本会加盟団体を対象に、海外研修員にふさわしい者（以下「候補者」という）を募集する。
- (2) 前項により当該団体（本会含む）が候補者を推薦する場合には、別に細則で定める海外研修員候補者推薦書を本会に提出するものとする。
- (3) 本会は、ひとりでも多くの「指導者」を、ひとつでも多くの団体（研修員派遣中の団体も含む）から派遣するよう選考する。同一団体から複数名の推薦を行う場合は、団体内で優先順位を付ける。

6. 海外研修員の決定

- (1) 本会は前項の推薦書に基づき書類選考ならびに面接の上、海外研修員を正式決定するものとする。
- (2) 海外研修員は、別に細則で定める誓約書及び研修計画書を本会に提出しなければならない。
- (3) 出発まで各自語学研修を行う。

7. 海外研修員に支給する経費

海外研修員に対する経費は、別に細則で定める要領で支払うものとする。

8. 海外研修状況の報告

海外研修員は3ヶ月毎に別に細則で定める研修状況報告書を本会に提出しなければならない。

9. 海外研修の中止

本会は海外研修員が本要項に違反したり、不適当な行為があったときは、その研修をとりやめ、帰国を命じることができるものとする。当該者は、その指示に従うものとする。

10. 海外研修報告書の提出

海外研修員は、帰国日より1ヶ月以内に別に細則で定める研修報告書を提出しなければならない。

11. その他

- (1) 海外研修員は帰国後、本会の開催する諸事業において研修報告を行う。
- (2) その他、海外研修員の派遣に関し必要な事項については別に細則で定めるものとする。

*平成12年4月1日	一部改訂
*平成14年4月1日	一部改訂
*平成16年4月1日	一部改訂
*平成18年11月1日	一部改訂
*平成22年12月22日	一部改訂
*平成27年1月20日	一部改訂
*平成28年4月1日	一部改訂
*平成30年4月1日	一部改訂
*令和2年3月31日	一部改訂（令和2年4月1日より適用）

スポーツ指導者海外研修事業 派遣者一覧

競技／年度	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4
陸上	澤木啓祐	宮川千秋	鬼塚純一	村木征人	室伏重信		永井 純		宮下 憲		吉田雅美			
水泳	*田口信教	松井 守	宮原利幸 二木広幸				元好三和子			高橋繁浩	高橋繁浩 坂本 弘	中森智佳子	*田中 京	
サッカー	森 考慈		松本育夫			田村 脩		山口芳忠					田嶋幸三	
スキー	*笠谷幸生 *富井澄博					古川年正					*八木弘和		北島光則	
テニス		本村 行									田村伸也			
ボート														
ボクシング									荻原千春					
バレーボール			古沢久雄		荒木田裕子	荒木田裕子								*田中幹保
体操		監物永三		北川淳一					*具志堅幸司			加納弥生	秋山エリカ	
バスケットボール	西尾末広	田中徹雄												
スケート					入沢孝一									
アイスホッケー														
レスリング	*市口政光			藤本英男		富山英明				高田裕司	宮原厚次			
セーリング		松山和興												
ウエイトリフティング	福田 弘		*山下 修			*細谷治朗					三宅義信			
ハンドボール	早川清孝		檜塚正一											田口 隆
自転車														
卓球										須賀健二			前原正浩	
相撲														
馬術									石黒健吉					
フェンシング			*藤沢義彦											
柔道	中村良三		重岡孝文		柏崎克彦			山下泰裕			細川伸二		松岡義之	山口 香
バドミントン				関根義雄							蘭 和真			
ライフル射撃	栗田俊昭		*香西俊輔					市村 忠						
剣道	巽 申直	志沢邦夫												
近代五種			富安一朗											
ラグビー				水谷 真										
カヌー		本田宗洋						福里修誠						
空手道			真野高一									西村誠司	佐久本嗣男	
なぎなた	田中ミヤ子													
ボブスレー・リュージュ			市橋善行								鈴木省三			
野球														筒井大助
武術太極拳													桑原典子	
トライアスロン														
デコンドー														
ハイアスロン														
合計	13	8	13	5	4	5	3	3	4	3	10	3	8	4

※合計数は延人数
*印は長期(2年)派遣者

平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19
	青戸慎司		内田孝男		*土江寛裕				吉田孝久	近野義人		今村文男		
	緒方茂生	緒方茂生		鈴木大地					岩崎恭子	林 享		*立花美哉		*稲田法子
野地照樹										木村孝洋				
		*佐藤 晃				菅野範弘		斗澤由香子	斗澤由香子				*工藤昌巳	佐々木耕司
			西野真一		米沢 徹				*植田 実				谷澤英彦	
		杉藤洋志	杉藤洋志											
					本 博国									
				佐藤浩明							山田晃豊		松本洋	
		梶谷信之		瀬尾京子	瀬尾京子	三浦華子	*畠田好章		菅原リサ	*松永里絵子	橋口美穂	原田睦巳		
							青柳 徹	青柳 徹	和田貴志	和田貴志				
清野 勝												坂井寿如		
	*佐藤 満			赤石光生					嘉戸 洋					
						松本真也								
		東根明人		松井幸嗣		玉村健次		*田中 茂			*山田永子			
		大門 宏												
								渡辺理貴		河野正和				
齋藤一雄														
*後藤浩二郎														岡崎直人
中西英敏			田辺陽子	岡田弘隆	持田達人	増地千代里	金野 潤	長井淳子	中村行成	檜崎教子	中村兼三	阿武教子		
金坂広幸						*藤井 彌		三野卓哉						
		勝田 隆				山本 巧								
成田寛志														
	栗山浩司													
							小島啓民							
				二宮秀夫				神庭裕里						
								佐藤吉朗						
7	4	7	4	7	5	7	5	7	8	8	4	4	4	2

競技／年度	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30	令和1	令和2	令和3	計
陸上	山崎一彦		高岡寿成	柳澤 哲	杉林孝法	今井美希	谷川聡	岩水嘉孝				*松岡佑起			23
水泳				原田早穂		中村真衣	*塩田義法	*三木二郎							22
サッカー	猿澤慎治			今泉守正	廣山 望	田村奈津枝	山尾光則	広瀬統一		小川秀樹	*須藤啓太	松原英輝	*見汐翔太	片桐央視	20
スキー								安食真治		久保貴寛	*河野恭介				15
テニス							土橋登志久	*岩渕聡			近藤大生				10
ボート		中村さなえ				*大戸淳之介		*白井祐介							6
ボクシング															3
バレーボール		*中垣内祐一 小林 敦				*菅野幸一郎		荻野正二	大久保茂和		山村宏太	*塚田圭裕			15
体操	*村田由香里	上村美揮			原 千華	黒田真由	*鹿島丈博	*遠藤由華		桑原俊	古城梨早				25
							大島杏子	*森起人							
バスケットボール															3
スケート	白幡圭史	神野由佳					*出島茂幸					*小原英志			10
アイスホッケー												*山中武司			4
レスリング					*笹本 睦			*米満達弘						*湯元進一	11
セーリング		中村健一		橋元郷											5
ウエイトリフティング															5
ハンドボール						*高橋豊樹		*舎利弗学						*嘉数陽介	11
自転車		沖 美穂				*福島晋一									5
						*小田島梨絵									
卓球			三原孝博		*梅村 礼										7
相撲															2
馬術															3
フェンシング					*和田武真		長良将司					*松岡慧			6
柔道	*井上康生			*塚田真希	*谷本歩実					金丸雄介			*田知本通		23
バドミントン															3
ライフル射撃															7
剣道															3
近代五種															2
ラグビー															4
カヌー		上原茉莉		*栗本宣和											5
空手道															5
なぎなた															2
ボブスレー・リュージュ															4
野球															3
武術太極拳															4
トライアスロン												*福井英郎			3
デコンドー											中川貴哉				2
ハイアスロン			小館 操					進藤隆							3
合計	5	8	3	6	7	9	9	12	1	4	7	6	2	3	251

スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

発行日現在

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
1	田口 信教	54年長期	水泳(競泳)	昭和54年10月24日 ～昭和56年10月31日	アメリカ インディアナ州 ブルーミントン	インディアナ大学 ジェームズ・E・カンシルマン	競泳の指導技術の理論と実践
2	市口 政光	54年長期	レスリング (グレコローマン)	昭和54年9月20日 ～昭和56年9月18日	アメリカ ウィスコンシン	ウィスコンシン大学 ウィリアム・P・モーガン	レスリング競技の運動構造と 技術分析に関する比較研究
3	笠谷 幸生	54年長期	スキー(ジャンプ)	昭和54年11月29日 ～昭和56年12月3日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 ジャンプコース 養成コース	ジャンプ競技におけるコーチング トレーニング法の修得
4	富井 澄博	54年長期	スキー(アルペン)	昭和54年9月5日 ～昭和56年5月15日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 アルペンコーチ 養成コース	滑降競技における運動機能技術 分析に関する比較研究
5	森 孝慈	54年短期	サッカー	昭和54年11月21日 ～昭和55年11月20日	ドイツ ケルン	西ドイツ ブンデス フットボールリーグ IFCケルン	ナショナルコーチにふさわしい 知識の習得、指導実践の現地研修
6	沢木 啓祐	54年短期	陸上競技(中・長距離)	昭和54年9月16日 ～昭和55年7月7日	アメリカ オレゴン州	オレゴン大学 オレゴントラッククラブ	米国における中・長距離 コーチング法の修得
7	早川 清孝	54年短期	ハンドボール	昭和54年10月11日 ～昭和55年9月25日	ドイツ ケルン	ケルン ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	西ドイツハンドボール組織のあり方 選手育成・ナショナルチームの指導体制
8	西尾 末広	54年短期	バスケットボール	昭和54年9月18日 ～昭和55年9月13日	アメリカ レキシントン	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールについての コーチング論の研修
9	福田 弘	54年短期	ウエイトリフティング	昭和54年11月5日 ～昭和55年10月30日	アメリカ ロサンゼルス	ロサンゼルス マーベリッククラブ他	ウエイトリフティングの理論 育成コーチ・システム
10	栗田 俊昭	54年短期	ライフル射撃	昭和54年12月5日 ～昭和55年11月24日	ドイツ ヴィスバーデン	西ドイツ ヴィスバーデン射撃学校	射撃技術の修得・コーチ学 トレーナー課程の研修
11	中村 良三	54年短期	柔道	昭和54年10月6日 ～昭和55年10月30日	フランス パリ	フランス柔道連盟	外人選手の特性への対応策 コーチング学の研修
12	巽 申直	54年短期	剣道	昭和54年10月18日 ～昭和55年9月10日	イギリス ロンドン	ネリキ道場 英国剣道連盟	英国人の剣道観に関する実態調査
13	田中 ミヤコ	54年短期	なぎなた	昭和54年10月18日 ～昭和55年10月18日	アメリカ ロサンゼルス	アメリカ なぎなた連盟他	アメリカにおける武道(スポーツ)の 動向等調査
14	監物 永三	55年短期	体操	昭和55年10月30日 ～昭和56年10月24日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	体操競技のコーチング 体操競技国際公認用語の習得
15	松井 守	55年短期	水泳(水球)	昭和55年10月17日 ～昭和56年10月16日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー ブタペスト B. V. S. Cクラブ	水球の技術研修
16	松山 和興	55年短期	ヨット	昭和55年11月15日 ～昭和56年11月12日	イギリスワイト島	英国ナショナル・ セイリングセンター 王立ヨット協会	ヨット・コーチ学の研修・選手強化 施設、方法の調査
17	本田 宗洋	55年短期	カヌー	昭和55年11月11日 ～昭和56年12月10日	ドイツ デュイスブルグ	西ドイツスポーツシューレ 西ドイツカヌー協会	カヌーの漕法および指導法
18	田中 徹雄	55年短期	バスケットボール	昭和55年10月15日 ～昭和56年10月15日	アメリカ ケンタッキー	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールコーチ指導法 ウエイトトレーニング他
19	宮川 千秋	55年短期	陸上競技(短距離)	昭和55年11月8日 ～昭和56年9月20日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ヘイワード	陸上競技における指導法 (特に短距離走について)
20	本村 行	55年短期	テニス	昭和55年11月5日 ～昭和56年11月4日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス他	テニス指導法(特にジュニアの指導法)
21	志澤 邦夫	55年短期	剣道	昭和55年12月26日 ～昭和56年12月27日	オーストラリア シドニー他	オーストラリア剣道連盟	オーストラリアの剣道実態調査 コーチ法の研修
22	香西 俊輔	56年長期	ライフル射撃	昭和56年11月15日 ～昭和58年11月15日	アメリカ テキサス	ラニー・ハッシュャム射撃学校	射撃技術の研修 メンタル・マネージメント・プログラムの研修
23	藤澤 義彦	56年長期	フェンシング	昭和56年8月2日 ～昭和58年8月1日	フランス パリ	国立スポーツ研究所 (I. N. S. E. P)	フェンシング基礎技術、競技規則 審判技術指導法等の研修
24	山下 脩	56年長期	ウエイトリフティング	昭和57年1月29日 ～昭和59年1月28日	ドイツ ミュンヘン	ナショナルスポーツセンター バイエルン州ウエイトリフティング連 盟	ウエイトリフティング理論、育成システム クラブ組織、コーチングシステム
25	古沢 久雄	56年短期	バレーボール	昭和56年12月15日 ～昭和57年10月13日	ブルガリア ソフィア	ソフィア体育大学 ブルガリアバレーボール連盟	バレーボール指導法の体系とスポーツ 社会学理論およびゲーム分析
26	鬼塚 純一	56年短期	陸上競技 (混成競技)	昭和56年9月10日 ～昭和57年9月11日	アメリカ カリフォルニア州	カリフォルニア州立大学 ロングビーチ校	混成競技における技術水準および競技水準向上に関する 具体的方法論の研修
27	宮原 利幸	56年短期	水泳(水球)	昭和56年10月25日 ～昭和57年10月31日	アメリカ カリフォルニア州	アメリカ水球 ナショナルチーム	水球競技におけるコーチ学の研修と技術の研修
28	二木 廣幸	56年短期	水泳(飛込)	昭和56年10月13日 ～昭和57年10月2日	アメリカ カリフォルニア州	ミッションビエホ・スイム・クラブ マイアミ大学	飛込技術の修得およびエージ・グループの指導法の研修
29	松本 育夫	56年短期	サッカー	昭和56年10月9日 ～昭和57年10月8日	ドイツ ケルン	西ドイツサッカー協会 I. F. C. ケルン	西ドイツにおけるジュニア選手の育成とその方法
30	壺塚 正一	56年短期	ハンドボール	昭和56年10月13日 ～昭和57年9月9日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	ナショナルプレーヤーの指導内容と指導体系、クラブチ ームシステム等研修
31	富安 一郎	56年短期	近代五種	昭和56年9月1日 ～昭和57年8月31日	アメリカ テキサス州	サントアントニオ近代五種トレー ニング・センター	選手強化策の現状把握、ジュニア底辺の普及対策 指導者養成の実態調査
32	真野 高一	56年短期	空手道	昭和56年11月25日 ～昭和57年11月25日	アメリカ ニューヨーク州	コロムビア大学体育学部 全米空手道連盟	競技力向上に関する研究(体力・技術) 空手におけるバ ワー、体力向上のための理論と実践
33	市橋 善行	56年短期	ボブスレー	昭和56年11月10日 ～昭和57年11月10日	スイス サンモリッツ他	スイスボブスレー連盟 イタリア・コルチナ ボブスレー製造メーカー	ボブスレー競技、技術向上のための実技研修 ボブス レー機の修理調整研修

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
34	重岡 孝文	56年短期	柔道	昭和56年12月3日 ～昭和57年12月2日	ドイツ ケルン	西ドイツ柔道連盟 ドイツ体育大学 (D. S. H. S)	ヨーロッパ各国の指導体制、トレーニング方法の研究、選手強化対策・ヨーロッパ選手権大会の研修と分析
35	村木 征人	57年短期	陸上競技(跳躍)	昭和57年10月21日 ～昭和58年10月14日	アメリカ サンディエゴ	カルフォルニア州 サンディエゴ大学	跳躍競技の技術研修
36	北川 淳一	57年短期	体操	昭和57年9月1日 ～昭和58年9月2日	カナダ トロント	ヨーク大学 カナダ体操協会	体操競技の技術水準向上のための指導法研修
37	藤本 英男	57年短期	レスリング (グレコローマン)	昭和57年10月14日 ～昭和58年10月15日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー レスリング協会	グレコローマンスタイルの高等技術の修得技術分析と実践での応用トレーニング法の研究
38	関根 義雄	57年短期	バトミントン	昭和57年12月1日 ～昭和58年11月29日	イギリス ロンドン	ウィンブルドン スカッシュ&バトミントンクラブ	世界トッププレイヤーの強化方法およびジュニア対策についての調査研究
39	水谷 眞	57年短期	ラグビー	昭和57年9月2日 ～昭和58年10月29日	イギリス ロンドン	イングランド ラグビー協会	戦法、技術論、およびコーチ学
40	入澤 孝一	58年短期	スケート(スピード)	昭和59年2月20日 ～昭和60年3月19日	ノルウェー オスロ	ノルウェースケート連盟 オスロ大学	ヨーロッパスピードスケートの強化体制およびコーチングの研修
41	柏崎 克彦	58年短期	柔道	昭和58年5月1日 ～昭和59年4月7日	イギリス ロンドン	BUDOKWAI イギリス柔道連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道技術およびトレーニング研究
42	室伏 重信	58年短期	陸上競技(投てき)	昭和58年10月16日 ～昭和59年10月4日	アメリカ ロサンゼルス	カリフォルニア大学 ロサンゼルス	アメリカ投てき選手を中心としたトレーニングおよび技術研究
43	荒木田 裕子	58年短期 59年短期	バレーボール	昭和58年10月12日 ～昭和60年10月30日	スイス ドイツ	スイスバレーボール連盟 西ドイツバレーボール連盟	ヨーロッパ諸国のバレーボール戦術 技術研修と情報収集
44	細谷 治朗	59年長期	ウエイトリフティング	昭和60年1月15日 ～昭和62年1月10日	ハンガリー ブタペスト	タタニアスポーツクラブ ハンガリーナショナルチーム	ウエイトリフティング理論、クラブ組織論、育成システム、コーチシステム
45	富山 英明	59年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和59年12月16日 ～昭和60年12月15日	アメリカ アイオワ州	アイオワ州立大学	レスリング競技のコーチ学
46	田村 脩	59年短期	サッカー	昭和59年9月19日 ～昭和60年9月24日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー大学他	サッカーの指導方法および実践
47	古川 年正	59年短期	スキー(アルペン)	昭和59年10月25日 ～昭和60年10月21日	アメリカ バーモント	アメリカスキー ナショナルチーム	アルペン 競技における運動構造と技術分析
48	本間 三和子	60年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	昭和60年8月15日 ～昭和61年8月23日	カナダ カルガリー	アクア・ベル スイミングスクール カルガリー大学	シンクロナイズドスイミングのコーチ法
49	永井 純	60年短期	陸上競技(中距離)	昭和60年11月16日 ～昭和61年11月15日	オーストラリア メルボルン	メルボルン大学	陸上競技のコーチング法
50	福里 修誠	60年短期	カヌー	昭和60年10月8日 ～昭和61年10月3日	ドイツ デュセルドルフ	西ドイツカヌー協会	カヌーの指導法と双方漕法
51	山下 泰裕	61年短期	柔道	昭和61年8月25日 ～昭和62年8月26日	イギリス ロンドン	イギリス柔道連盟	英国及びヨーロッパ各国の柔道強化対策と指導法
52	山口 芳忠	61年短期	サッカー	昭和61年10月24日 ～昭和62年10月30日	ドイツ ミュンヘン	西ドイツサッカー協会 F. C. ハイエルン ミュンヘン	西独プロサッカーにおける指導方法及びゲームの戦い方
53	市村 忠	61年短期	ライフル射撃	昭和61年11月9日 ～昭和62年11月8日	ドイツ ヴュースターデン	西ドイツ射撃協会 国立射撃学校	ライフル射撃における力学及び心理学的要素についての個人間の差異の解析に関する研究
54	具志堅 孝司	62年長期	体操	昭和62年9月17日 ～平成元年9月4日	ドイツ チュービンゲン	チュービンゲン大学	体操競技の指導方法
55	萩原 千春	62年短期	ボクシング	昭和62年10月1日 ～昭和63年10月5日	アメリカ クラマスコール	オレゴン工科大学	アメリカにおけるボクシングのトレーニング法
56	宮下 憲	62年短期	陸上競技(障害)	昭和62年8月26日 ～昭和63年8月29日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学	ハードル種目に関する技術・トレーニング方法論の研究
57	石黒 建吉	62年短期	馬術	昭和62年11月12日 ～昭和63年11月12日	イギリス ウィストン	アングロープファーム トレーニングセンター	人馬の育成・審判員、翻訳、乗馬育成に関する研修・調査
58	高橋 繁浩	63年短期 元年短期	水泳(競泳)	昭和63年10月14日 ～平成2年9月16日	アメリカ コロラドスプリングス	コロラドスプリングス スポーツ科学研究所	運動生理学を中心に水泳の科学的トレーニング及びコーチングについて
59	須賀 健二	63年短期	卓球	昭和63年10月13日 ～平成元年10月8日	イギリス ヘステイニング	国際卓球連盟	卓球コーチ学研修及び国際卓球連盟について
60	高田 祐司	63年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和63年11月5日 ～平成元年10月26日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア大学	レスリングのトレーニング方法、指導法及び科学性について
61	八木 弘和	元年長期	スキー	平成元年11月11日 ～平成3年9月18日	オーストリア ザールフェルデン	オーストリア スキー連盟	ジャンプ一流国の強化システムとトレーニング方式の研修
62	吉田 雅美	元年短期	陸上競技(やり投)	平成元年9月15日 ～平成2年9月14日	アメリカ シアトル	ワシントン大学	投てき競技者に必要な基礎的トレーニング法、栄養学、素材発掘の要点等の研修
63	坂本 弘	元年短期	水泳(競泳)	平成元年10月25日 ～平成2年10月24日	アメリカ コーバリス	オレゴン州立大学	競技者の指導テクニック及び泳法テクニック
64	田村 伸也	元年短期	テニス	平成元年10月3日 ～平成2年10月2日	アメリカ フロリダ	Harry Homman Tennis Camp	テニスコーチ学の全般についての研修
65	宮原 厚次	元年短期	レスリング	平成元年11月1日 ～平成2年10月31日	ドイツ フランクフルト	西ドイツ レスリング協会	グレコローマンスタイル技術研修及びコーチ学研修
66	三宅 義信	元年短期	ウエイトリフティング	平成元年11月6日 ～平成2年11月2日	アメリカ サンフランシスコ	アメリカ ウエイトリフティング協会	ウエイトリフティングのコーチ学、スポーツクラブ組織におけるシステムと指導方法、軍隊における選手指導とそのシステム

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
67	細川 伸二	元年短期	柔道	平成元年11月4日 ～平成2年11月3日	フランス パリ	フランス柔道連盟	フランスを中心としたヨーロッパにおける科学的トレーニングの理論を含む選手強化の対策の現状と比較検討及び社会体育としての普及発展状況とその指導方法について
68	蘭 和真	元年短期	バドミントン	平成元年10月10日 ～平成2年10月9日	イギリス ロンドン	英国バドミントン協会	イギリスを中心としたヨーロッパ各国の選手強化策、特にオリンピック対策(体制、組織、方法)の調査
69	鈴木 省三	元年短期	ボブスレー	平成元年12月10日 ～平成2年12月9日	カナダ カルガリー	カルガリー大学	医・科学的サポートの現状、選手育成システム、トレーニング計画と年間計画
70	加納 弥生	2年短期	体操	平成2年9月26日 ～平成3年9月19日	アメリカ	ユタ大学	体操競技の指導方法(コログラフィ)と選手育成システム
71	西村 誠司	2年短期	空手道	平成2年11月1日 ～平成3年10月31日	アメリカ シアトル	アメリカ空手道連盟	アメリカ大陸の空手道近代技術の研究
72	水野 智佳子	2年短期	水泳(競泳)	平成2年10月27日 ～平成3年10月26日	アメリカ コロラドスプリングス	USOCスポーツ科学研究所	競技者の泳法及び指導法
73	田中 京	3年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成3年9月12日 ～平成5年9月11日	アメリカ	Walnut Creek Aquanats Synchronized Swimming・Club	ウォールナットクリークでの実践トレーニング方法及びコーチング研修他
74	秋山 エリカ	3年短期	体操(新体操)	平成3年10月5日 ～平成4年8月15日	ロシア	Ретной Вокзал (Динамо) Москва	新体操の指導方法とソビエトにおける選手育成システムの研修
75	田嶋 幸三	3年短期	サッカー	平成3年10月7日 ～平成4年9月27日	ドイツ イタリア	サンブリア ジェノバ他	サッカー選手の一貫指導、特に10～18歳迄のトップ選手の指導システムの研修
76	松岡 義之	3年短期	柔道	平成3年11月8日 ～平成4年11月7日	アメリカ	アメリカ柔道連盟(VSJF)他	アメリカにおける科学的トレーニング理論・方法を含む選手強化対策の現状と比較検討。社会体育としての柔道の普及発展状況とその指導方法について研修
77	前原 正浩	3年短期	卓球	平成3年9月16日 ～平成4年9月15日	イギリス	国際卓球連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ各国卓球協会の指導体制、強化体制、トレーニング方法の研修
78	勝部 典子	3年短期	武術太極拳	平成3年11月27日 ～平成4年11月26日	中国 北京	北京体育学院	武術競技「南拳」の競技技術及びコーチングメソッドを北京市、中国武術研究会にて研修
79	佐久本 嗣男	3年短期	空手道	平成3年11月3日 ～平成4年11月2日	ドイツ	ドイツ トレーナーアカデミー他	ヨーロッパにおける空手道近代トレーニングの実態を視察調査、研究するとともにその指導法の研修
80	北島 光則	3年短期	スキー(コンバインド)	平成3年6月20日 ～平成4年6月19日	ノルウェー	ノルウェー スキー連盟他	ノルデックコンバインド競技指導技術の研究とコーチングをノルウェーナショナルチームにおいて研修
81	田中 幹保	4年長期	バレーボール	平成4年9月20日 ～平成6年8月15日	アメリカ イタリア	アメリカ ナショナルチーム イタリアプロリーグ他	世界最強イタリアチームの技術、戦術の研究と修得 イタリアリーグの運営システムの研究、アメリカのスポーツ医学から見た選手強化策
82	田口 隆	4年短期	ハンドボール	平成4年11月16日 ～平成5年11月15日	ドイツ	ケルン体育大学他	ヨーロッパでのトレーニング指導方法、理論の研修及び新戦術の研究
83	山口 香	4年短期	柔道	平成5年2月15日 ～平成6年2月14日	イギリス	ハイウイカム柔道センター	イギリス柔道の強化の実態他
84	筒井 大助	4年短期	野球	平成4年8月31日 ～平成5年8月30日	アメリカ	ジョージア南大他	アメリカ式ベースボールの考察
85	野地 照樹	5年短期	サッカー	平成5年12月8日 ～平成6年12月7日	イギリス	イブスウィッチ フットボールクラブ	イングランドサッカーのコーチング イングランドサッカーの指導者養成
86	齋藤 一雄	5年短期	相撲	平成5年10月3日 ～平成6年10月2日	オーストラリア	オーストラリア相撲連盟	オーストラリアのタレント発掘方法及びジュニアからトップまでの選手育成システム、および体力強化の実情等についての研修
87	中西 英敏	5年短期	柔道	平成5年12月21日 ～平成6年12月20日	イギリス	エジンバラクラブ	英国および欧州を中心とした欧州柔道の技術と指導法の研究および指導体制、強化体制ならびにトレーニング方法の研修(強化現状把握・指導体系・練習体系・強化システム)
88	金坂 広幸	5年短期	ライフル射撃	平成5年10月31日 ～平成6年10月30日	ドイツ	U、Sオリンピック シューティングセンター	エア・ライフル、スモール・ライフル射撃の指導技術およびメンタルトレーニング
89	成田 寛志	5年短期	空手道	平成5年10月23日 ～平成6年10月22日	アメリカ	ジョージタウン大学	選手強化法を含むスポーツ医学全般の研修 空手道における動作の分析 脊椎のスポーツ傷害の診断と治療の研修
90	清野 勝	5年短期	アイスホッケー	平成5年8月26日 ～平成6年8月25日	カナダ	カルガリー・フレイムス(NHL)他	カナダナショナルチームのスタッフとして、アイスホッケーのコーチ学、心理学、技術の習得
91	後藤 浩二郎	5年長期	馬術	平成5年11月18日 ～平成7年11月17日	フランス ル・マン	ル・マン乗馬クラブ他	総合馬術競技に係わる選手の育成と競技馬匹の調教
92	青戸 慎司	6年短期	陸上競技	平成6年11月7日 ～平成7年11月6日	アメリカ コロラド	コロラド大学 ボルダール校	陸上競技、主として短距離走のトレーニングについて研修し実践的にトレーニングを積み競技力向上のための指導法を研究する
93	栗山 浩司	6年短期	リュージュ	平成6年10月16日 ～平成7年10月15日	ドイツ	ドイツ ボブスレー・リュージュ連盟 (DBSV)	リュージュ競技の科学的なトレーニングシステムの現状、ジュニア選手の発掘および選手育成プログラムについて
94	緒方 茂生	6年短期 7年短期	水泳	平成6年11月14日 ～平成8年11月22日	アメリカ ミシガン州他	ミシガン大学 アメリカ水泳連盟他	アメリカの水泳とコーチングの実習
95	佐藤 満	6年長期	レスリング	平成6年11月17日 ～平成8年11月16日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア州立大学	アメリカレスリング協会のシステムの研究トレーニング指導法及び処方の研究 レスリング技術の研究
96	梶谷 信之	7年短期	体操	平成7年9月1日 ～平成8年8月29日	アメリカ サンフランシスコ	スタンフォード大学	体操競技の指導方法について 選手育成システムについて
97	東根 明人	7年短期	ハンドボール	平成7年8月30日 ～平成8年8月29日	ドイツ ライプチヒ	ライプチヒ大学	ハンドボール競技におけるトレーニングコーチ方法全般について
98	大門 宏	7年短期	自転車	平成8年2月2日 ～平成9年2月1日	イタリア	スポーツグループエキップ93	ロードレースの新しい技術、高度な指導技術の研究開発 諸外国の競技力の分析・戦術・戦法について
99	勝田 隆	7年短期	ラグビー	平成7年9月25日 ～平成8年9月24日	イギリス	イングランド・ラグビー フットボール・ユニオン	最新ラグビーとコーチングの理論と実際について ラグビー先進国の強化システムと内容について

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
100	佐藤 晃	7年長期	スキー (スペシャルジャンプ)	平成7年10月25日 ～平成9年10月25日	フィンランド	クオピオ市 ブイオスキークラブ	フィンランドジャンプトレーニング内容指導法(ジュニア含む)
101	内田 孝男	8年短期	陸上競技	平成8年9月30日 ～平成9年9月25日	オーストラリア	オーストラリア 国立スポーツ研究所(AIS) キャンベラ	各種測定、トレーニングの研修 コーチングの実施研修
102	西野 真一	8年短期	テニス	平成8年10月31日 ～平成9年10月30日	アメリカ	ウィロツリーテニスクラブ他	アメリカのジュニア育成システムの環境医療とデータの重要性 アメリカのテニス界について
103	杉藤 洋志	7年短期 8年短期	ボート	平成7年9月1日 ～平成9年8月31日	カナダ 他	カナダ国立コーチング研修所	コーチングの実践研修
104	田辺 陽子	8年短期	柔道	平成8年11月24日 ～平成9年11月25日	イギリス スコットランド	クサック柔道クラブ	イギリスの柔道強化策及び環境について
105	佐藤 浩明	9年短期	バレーボール	平成9年10月1日 ～平成10年9月28日	オーストラリア キャンベラ市	The Australian Institute of Sport(AIS)	オーストラリア・スポーツ研究所の心理的支援体制の調査
106	赤石 光生	9年短期	レスリング	平成9年10月23日 ～平成10年10月30日	アメリカ アリゾナ州テンピー市	ARIZONA STATE UNIVERSITY	アメリカ合衆国が、世界へ向けたコーチングの実習
107	松井 幸嗣	9年短期	ハンドボール	平成9年10月23日 ～平成10年10月22日	ドイツ ケルン	ドイツスポーツ大学ケルン	ドイツにおけるチーム強化のための練習法・指導法と強化対策の実態及び指導者の育成
108	岡田 弘隆	9年短期	柔道	平成9年10月6日 ～平成10年9月30日	イギリス ロンドン	武道会	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
109	二宮 秀夫	9年短期	武術太極拳	平成9年9月26日 ～平成10年9月25日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種目・武術全般のトレーニング法
110	鈴木 大地	9年長期	水泳	平成10年2月4日 ～平成12年2月3日	アメリカ マサチューセッツ州	ハーバード大学 アメリカ水泳連盟 他	アメリカにおける競泳のコーチングの実習
111	米沢 徹	10年短期	テニス	平成10年10月31日 ～平成11年10月30日	フランス アキテーヌ州 アルカッション市	アルカッションテニスクラブ	フランスの指導法と練習内容の把握、フランスシステムの把握、世界レベルのテニス研究、ヨーロッパテニスの研究
112	瀬尾 京子	9年短期 10年短期	体操	平成9年10月5日 ～平成11年10月4日	アメリカ オクラホマ州 オクラホマ市	Dynamo Gymnastics Club	アメリカでの体操競技における指導方法
113	本 博国	10年短期	ボクシング	平成10年9月8日 ～平成11年9月6日	ウズベキスタン タシケント市	"DINAMO"STADIUM PUSHKIN SQUARE 他	科学的トレーニング、指導法、栄養管理
114	持田 達人	10年短期	柔道	平成10年11月10日 ～平成11年10月31日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	フランスの国立スポーツ、体育研究所の指導体系
115	土江 寛裕	10年長期	陸上競技	平成11年1月15日 ～平成13年1月13日	オーストラリア シドニー・キャンベラ	NSW Institute of Sport, Australian Institute of Sport(AIS)	オリンピック地元開催に向けた強化体制と、競技力向上のためのトレーニング方法の習得
116	藤井 彌	11年長期	ライフル射撃	平成11年10月29日 ～平成13年10月27日	フランス パリ	フランス射撃協会	ジュニア期からの一貫指導システムの研究
117	菅野 範弘	11年短期	スキー(ジャンプ)	平成11年10月3日 ～平成12年10月2日	スロベニア ブレッド市 他	SLOVENIA SMUCARSKI KLUB TRIGLAV KRANJ	スロベニアにおけるスキージャンプの強化システム、トレーニング指導方法、転載におけるコンディショニング
118	三浦 華子	11年短期	体操	平成11年8月10日 ～平成12年8月8日	アメリカ ボイシー市	Bronco Elite Gymnastics Club Boise State University(BSU)	アメリカ体操競技におけるジュニア、大学生の指導方法
119	松本 真也	11年短期	セーリング	平成11年12月20日 ～平成12年12月18日	アメリカ アナポリス	United States Naval Academy	セーリング先進国のアメリカ合衆国におけるコーチング研修及び実態調査
120	玉村 健次	11年短期	ハンドボール	平成11年10月12日 ～平成12年10月10日	スウェーデン イエーテボリ市	IK Savehof Tus Shutterwald	北欧のハンドボール技術におけるチーム強化のための練習法・指導法、コーチング全般
121	増地 千代里	11年短期	柔道	平成11年9月11日 ～平成12年9月12日	イギリス ロンドン	武道会、ハイウィカム柔道センター キャンベラ柔道クラブ	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
122	山本 巧	11年短期	ラグビー	平成11年6月14日 ～平成12年6月10日	イギリス ケンブリッジ	Cambridge University Rugby Union Football Club 他	ラグビー先進国の強化体制及びコーチングに関する研修
123	畠田 好章	12年長期	体操	平成12年10月28日 ～平成14年10月27日	アメリカ カリフォルニア	スタンフォード大学	アメリカにおけるトップ選手への指導法及び練習環境や強化育成方法の研究
124	青柳 徹	12年短期 13年短期	スケート(スピード)	平成12年8月27日 ～平成14年9月12日	オランダ フローニンゲン市	オランダスケート連盟	スピードスケート王国・オランダにおけるコーチングスキルの習得及び選手強化体制の見極め
125	渡辺 理貴	12年短期	卓球	平成12年9月14日 ～平成13年9月9日	イギリス ノッティンガム	イギリス卓球協会 他	ヨーロッパのクラブシステムとコーチング
126	金野 潤	12年短期	柔道	平成12年9月10日 ～平成13年9月9日	アメリカ コロラドスプリングス	アメリカ柔道連盟	USOCでの格闘技グループのコーチング方法アメリカ柔道連盟の強化システム
127	小島 啓民	12年短期	野球	平成12年10月13日 ～平成13年10月10日	アメリカ キューバ	スタンフォード大学 サンタクララ大学 他	アメリカ大学野球トップのスタンフォード大学チーム、キューバのナショナルチームのコーチング
128	田中 茂	13年長期	ハンドボール	平成13年8月18日 ～平成15年8月7日	スペイン バルセロナ	カタルーニャハンドボール協会	スペインのハンドボール技術及び練習法、指導法の習得
129	長井 淳子	13年短期	柔道	平成13年9月24日 ～平成14年9月23日	イギリス バックinghamシャー	National Judo Academy, Cambely Judo Club, High Wycombe Judo Centre	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道の現状と選手強化の体制、指導法について
130	三野 卓哉	13年短期	ライフル射撃	平成13年9月17日 ～平成14年8月11日	ドイツ ヰイスバーデン	ドイツ射撃協会 ブルガリア射撃協会	仕事と競技を両立することができるシステムの調査、ならびにそのシステムによる選手への指導方法
131	神庭 裕里	13年短期	武術太極拳	平成13年10月19日 ～平成14年10月18日	中国 北京	北京体育大学	長拳3種及び武術全般のコーチ研修
132	佐藤 吉朗	13年短期	トライアスロン	平成14年1月19日 ～平成15年1月20日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	ASIをトレーニング拠点として活動しているジュニアショナルチームに帯同

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
133	斗澤 由香子	13年短期 14年短期	スキー	平成13年8月14日 ～平成14年8月28日 平成14年11月5日 ～平成15年12月27日	カナダ ヴィクトリア	National Coaching Institute(B.C)	リースタイルスキーに関するコーチングの実戦研修
134	植田 実	14年長期	テニス	平成14年12月9日 ～平成17年1月23日	スペイン バルセロナ	サンチェス&カサル テニスアカデミー	コーチングの実践研修
135	吉田 孝久	14年短期	陸上競技	平成14年7月27日 ～平成15年7月26日	イギリス レスターシャー	ラフバラ大学UK陸連ハイパフォーマンスセンター(HIPC)	跳躍種目コーチング技能の修得
136	岩崎 恭子	14年短期	水泳	平成14年10月4日 ～平成15年9月30日	アメリカ ロサンゼルス	ミッションビエホ・ナゲドーズ・スイミングクラブ	ジュニアコーチングの実戦研修
137	菅原 リサ	14年短期	体操	平成14年8月31日 ～平成15年8月31日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	コーチングの実践研修
138	和田 貴志	14年短期 15年短期	スケート(スピード)	平成14年7月25日 ～平成15年7月24日 平成15年9月1日 ～平成16年8月31日	アメリカ ソルトレークシティ	ユタ・オリンピックオーバル	コーチング及び強化システム研修
139	嘉戸 洋	14年短期	レスリング	平成14年8月16日 ～平成15年7月21日	ウクライナ キエフ	ウクライナ国立スポーツ専門大学	コーチングの実践研修
140	中村 行成	14年短期	柔道	平成14年8月18日 ～平成15年8月17日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟及びEdinburgh Club	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及び コーチングについて
141	松永 里絵子	15年長期	体操(新体操)	平成15年10月5日 ～平成17年10月4日	カナダ バンクーバー	War Memorial Gymnasium	選手強化育成システム及びコーチングの 実戦研修
142	林 享	15年短期	水泳	平成15年10月16日 ～平成16年10月15日	アメリカ バークレー	カリフォルニア大学バークレー校	コーチング及びトレーニング理論の研修
143	橋崎 教子	15年短期	柔道	平成15年9月19日 ～平成16年9月18日	アメリカ オマハ	Offutt Air force Base Judo Team	コーチング及びトレーニング方法の研修
144	近野 義人	15年短期	陸上競技	平成16年1月19日 ～平成17年1月18日	アメリカ デーヴィス	カリフォルニア大学デーヴィス校	中距離トレーニング及びコーチング研修、 バイオメカニクス研究
145	河野 正和	15年短期	卓球	平成15年9月23日 ～平成16年9月22日	イギリス ノックンガム	英国ナショナルトレーニングセン ター、イギリス卓球協会	英国及び欧州各国の卓球コーチング システム、クラブ運営システムの研修
146	木村 孝洋	15年短期	サッカー	平成15年8月1日 ～平成16年7月31日	イギリス ロンドン	アーセナル	若手有望選手の指導・育成方法の研修
147	坂井 寿如	15年短期	アイスホッケー	平成15年8月6日 ～平成16年8月5日	カナダ エドモントン	Concordia大学	コーチングの実戦研修
148	山田 永子	16年長期	ハンドボール	平成16年8月1日 ～平成18年7月12日	ノルウェー オスロ	Bekkelagets Sport Club	ハンドボールの指導法、強化システムの研修
149	中村 兼三	16年短期	柔道	平成16年10月12日 ～平成17年11月23日	イギリス ロンドン	Budokwai柔道クラブ	コーチング、ナショナルチームとの交流
150	橋口 美穂	16年短期	体操	平成16年11月28日 ～平成17年11月30日	オーストラリア ブリスベン	Moreton Bay College	ジュニア選手の育成、ナショナル強化選手の指導方法、 環境施設運営面等の研修(Moreton Bay Collegeで研修)
151	山田 晃豊	16年短期	バレーボール	平成16年9月29日 ～平成19年9月2日	イタリア ラベンナ	イタリア女子バレーボール・ナショナル ユースチーム(CLUB ITALIA)	世界トップレベルのセリエAを中心に ヨーロッパトップリーグの視察と コーチング、チームプレーの研修
152	立花 美哉	17年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成17年10月13日 ～平成19年11月12日	アメリカ サンタクララ	Santa Clara Aquamaid Synchronized Swim Club	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深いアメリカで指導を 中心にスポーツマネジメントを学ぶ
153	今村 文男	17年短期	陸上競技	平成17年9月9日 ～平成18年9月1日	イタリア サルツォ	Scuola di Marcia e degli sport in Saluzzo	競歩選手におけるトレーニング方法及びコーチングに関する 研修
154	原田 睦巳	17年短期	体操	平成17年9月13日 ～平成18年9月11日	アメリカ バロアルト	Men's Gymnastics Arrillage Family Center	選手強化に関する指導方法の研修および、大学組織の 競技運営方法の比較の調査
155	阿武 教子	17年短期	柔道	平成17年8月25日 ～平成18年8月24日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	柔道競技人口が世界一のフランスにおいての指導方法や 他の欧州各国の柔道事情を学ぶ
156	工藤 昌巳	18年長期	スキー(アルペン)	平成18年5月26日 ～平成20年5月24日	オーストリア インズブルク	オーストリアスキーチーム帯同	アルペンスキーコーチングについて学び、オーストリア国 家検定アルペンスキーコーチ資格取得を目指す
157	谷澤 英彦	18年短期	テニス	平成18年11月30日 ～平成19年11月29日	オーストラリア ゴールドコースト	パットキャッシュインターナショナル テニスアカデミー	ジュニアからプロ選手までの指導方法
158	松本 洋	18年短期	バレーボール	平成18年11月30日 ～平成18年12月27日	ブラジル リオデジャネイロ	Centro de desenvolvimento de Voleibol	ブラジルバレーボールの強化システムとスキル、プロフェッ ショナルリーグの現状について
159	岡崎 直人	18年短期	フェンシング	平成18年11月20日 ～平成19年11月19日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	トレーニング方法全般の修得およびマネージメント
160	稲田 法子	19年長期	水泳	平成19年12月16日～ 平成21年12月14日	アメリカ アリゾナ フェニックス	Brophy College Preparatory	アシスタントとしてトレーニング方法を学ぶ
161	佐々木 耕司	19年短期	スキー(スノーボード)	平成19年8月26日～ 平成20年8月24日	カナダ カルガリー	National Coaching Institute Calgary	コーチング技術、トレーニング方法を習得し施設を視察。カナダの コーチングシステムやその構築背景を研究
162	村田 由香里	20年長期	体操(新体操)	平成20年12月19日 ～平成22年12月18日	ロシア イルクーツク	ディナモスポーツクラブ	ロシア新体操の選手育成システム及び指導方法について 学ぶ
163	井上 康生	20年長期	柔道	平成21年1月11日 ～平成23年1月10日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟	英語研修及びイギリスを拠点として、ヨーロッパにおける柔 道指導法及びヨーロッパ各国の柔道事情を学ぶ
164	山崎 一彦	20年短期	陸上競技	平成20年9月20日 ～平成21年9月19日	イギリス レスター	ラフバラ大学	イギリスのオリンピック強化システムと対策の調査および コーチングを学ぶ
165	猿澤 真治	20年短期	サッカー	平成20年8月13日 ～平成21年8月5日	フランス クレーズフォンテーヌ	フランスナショナルフットボールクラ ブ	フランスナショナルフットボール学院にて、U-13～15年代 の育成プログラム全般を学ぶ

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
166	白幡 圭史	20年短期	スケート(スピード)	平成20年6月1日 ～平成21年5月31日	オランダ フローニンゲン	ヘーレンフェーン室内リンク	スピードスケートコーチングテクニックおよび選手強化、選手育成システムを学ぶ
167	沖 美穂	21年長期	自転車	平成21年5月9日 ～平成23年3月31日	イタリア ベルガモ	Selle Italia-Ghezzi	自転車コーチング技術・語学研修及びイタリアサイクリングコーチングライセンスの習得
168	中垣内 祐一	21年長期	バレーボール	平成21年8月3日 ～平成23年5月2日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	世界トップレベルの指導法習得
169	中村 さなえ	21年短期	ボート	平成21年9月9日 ～平成22年9月8日	ドイツ ボツダム	Olympia Stutz Punkt Brandenburg	ナショナルチームのマネジメント、コーチング、選手育成システム、選手選考方法、コーチ育成プログラムを研修
170	小林 敏	21年短期	バレーボール	平成21年7月22日 ～平成22年7月20日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	各国シニア・ジュニア等トップチームの合宿にて指導者としての研修を行い、指導法、強化システムについて学ぶ
171	上村 美輝	21年短期	体操(体操競技)	平成22年2月27日 ～平成23年2月26日	アメリカ テキサス	Bela Karolyi Gymnastics Center	アメリカ体操界のジュニア育成システム及びその指導方法について学ぶ
172	神野 由佳	21年短期	スケート(ショートトラック)	平成21年4月27日 ～平成22年4月26日	カナダ カルガリー	Calgary Olympic Oval	ショートトラックにおける指導方法及び選手強化、選手育成システムについて
173	中村 健一	21年短期	セーリング	平成22年3月31日 ～平成23年3月30日	イギリス サザンブトン	Royal Yachting Association	ユース世代の育成・強化について学ぶ
174	上原 茉莉	21年短期	カヌー	平成21年10月11日 ～平成22年10月10日	ドイツ マグデブルク	ドイツカヌー連盟	日本カヌー界のレベルアップとロンドンオリンピックでメダルを獲得するための技術・トレーニング方法を研修する
175	高岡 寿成	22年短期	陸上競技	平成22年8月31日 ～平成23年8月30日	アメリカ マンモスレイク	マンモストラッククラブ	高地トレーニングなどの科学的なトレーニング及びアメリカの選手強化方法
176	三原 孝博	22年短期	卓球	平成22年8月30日 ～平成23年8月11日	中国 河北省	正定国家訓練基地	若年層からトップまでの育成方法
177	小籠 操	22年短期	バイアスロン	平成22年6月21日 ～平成23年6月20日	オーストリア ザルツブルグ	オーストリアスキー連盟 オーストリアバイアスロン連盟	バイアスロン競技におけるスキー技術、射撃技術、指導法を習得し、バイアスロン連盟組織のあり方についても学ぶ
178	塚田 真希	23年長期	柔道	平成23年9月7日～ 平成25年9月6日	イギリス ロンドン	エジンバラ柔道クラブ 武道会	英語研修、そして国外における柔道指導法および、諸外国の柔道事情を学ぶ。また諸外国コーチとのネットワークを構築する。
179	栗本 宣和	23年長期	カヌー	平成23年7月17日～ 平成25年7月16日	ハンガリー ブラハ	ハンガリーカヌー連盟	ハンガリーにおけるカヌー・カヤックスポーツの組織体制とコーチングシステム・強化プログラムのあり方について学ぶ。
180	柳澤 哲	23年短期	陸上競技	平成23年10月8日 ～平成24年10月7日	オーストラリア ブリスベン	Australian Institute of Sport (AIS)	各世代における体系化された練習方法の習得と組織としての運営方法
181	原田 早穂	23年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成23年5月15日 ～平成24年5月14日	マルタ共和国 スリーマ	Aquatic Sports Association of Malta	語学の鍛錬とともに、シンクロの中心であるヨーロッパにおいて指導力を磨く。
182	今泉 守正	23年短期	サッカー	平成23年7月13日 ～平成24年6月1日	アメリカ フロリダ	フロリダ州立大学(FSU)	US ODPプログラムの研修、IMGアカデミーでの育成プログラム研修等
183	橋元 郷	23年短期	セーリング	平成23年9月1日 ～平成24年8月31日	イギリス サザンブトン	国際セーリング連盟 英国セーリング連盟	英国における主にユース世代(U-19)の育成システム、およびセーリング組織の運営方法
184	笹本 睦	24年長期	レスリング	平成24年6月2日～ 平成26年6月1日	ドイツ ミュンヘン	Sportinternat Schifferstadt	ヨーロッパにおけるレスリングのコーチングスキルの習得と語学習得とプロクラブの運営システム等。
185	梅村 礼	24年長期	卓球	平成24年6月27日～ 平成26年6月26日	オーストリア ザルツブルグ	Werner Schlager Academy	欧州の強豪クラブにてヨーロッパの強化育成システムを学ぶ。
186	和田 武真	24年長期	フェンシング	平成24年7月25日～ 平成26年7月24日	ハンガリー ブタペスト	Budapest Honved(旧軍隊チーム)	元ナショナルチームの所属クラブにてビギナーからトップ選手に対し指導を行いながら指導技術、マネジメントを学ぶ。
187	谷本 歩実	24年長期	柔道	平成25年3月31日～ 平成27年3月30日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	欧州の強豪国の一つであるフランスにおいて、柔道指導法、強化システムの調査、研究及び周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
188	杉林 孝法	24年短期	陸上競技	平成24年9月15日～ 平成25年9月14日	スウェーデン ヨーテボリ	エルグリーテIS	世界トップレベルチーム及びコーチのもとでコーチングの研修を行うとともに語学研修を行う。
189	廣山 望	24年短期	サッカー	平成25年1月8日～ 平成26年1月7日	スペイン マドリッド	RCDエスパニョール	欧州のプロクラブにおけるトップ、育成、普及各レベルのコーチングを学ぶ。また、ヨーロッパの指導者ライセンスを取得する。
190	原 千華	24年短期	体操(新体操)	平成24年11月1日～ 平成25年10月31日	ベラルーシ ミンスク	National Center of Olympic Training in Rhythmic Gymnastics	ベラルーシのジュニア期の選手発掘・育成方法から、日本選手が国際試合で結果を残すための指導方法について学ぶ。
191	大戸 淳之介	25年長期	ボート	平成25年9月14日～ 平成27年9月13日	イギリス ロンドン	Staines Boat Club	チームマネジメント、コーチ育成プログラム他
192	菅野 幸一郎	25年長期	バレーボール	平成25年7月4日～ 平成27年4月27日	アメリカ	テキサス大学	バレーボール指導方法、世界レベルのチーム強化方法
193	高橋 豊樹	25年長期	ハンドボール	平成25年8月17日～ 平成27年8月16日	デンマーク スペンボー	オーレホイスコーレ ハンドボルト レーナリエ	ジュニア育成、コーチ育成システムおよびその指導方法、強化システムについて学ぶ
194	福島 晋一	25年長期	自転車(ロード)	平成25年11月18日～ 平成27年11月17日	フランス	SA Vendee Cyclisme	チームマネジメント、コーチング、フランス語、IF関係等
195	小田島 梨絵	25年長期	自転車(MTB)	平成25年8月2日～ 平成27年7月31日	スイス	Velo Club Tamaro	地域チーム運営、ジュニア選手のトレーニング方法、英語・イタリア語習得
196	中村 真衣	25年短期	水泳(競泳)	平成25年9月8日～ 平成27年9月7日	アメリカ ミッションビエホ	ナタドールズスイミングクラブ	普及、強化、指導者育成等全般
197	今井 美希	25年短期	陸上競技	平成25年7月1日～ 平成26年6月30日	スウェーデン ヴェクショー	IFKヴェクショー	跳躍(特に走り高跳)指導論・トレーニング論・トップアスリートの男性選手・女性選手の育成方法の違い、スウェーデン陸連関連
198	田村 奈津枝	25年短期	サッカー	平成25年6月13日～ 平成26年6月12日	ドイツ フライブルグ	フライブルグFC	トップチームの普及、強化、指導者養成等全般を学ぶ

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
199	黒田 真由	25年短期	体操(体操競技)	平成25年8月3日～平成26年8月26日	アメリカ テキサス	World Olympic Gymnastics Academy	ジュニア期の育成方法
200	塩田 義法	26年長期	水泳(水球)	平成26年11月18日～平成28年11月17日	アメリカ(ロサンゼルス)	USA Water Polo, Inc.	アメリカの代表チーム及び大学水球チームのコーチング、マネジメント方法、選手育成システム、コーチ育成プログラムを研修
201	鹿島 丈博	26年長期	体操(体操競技)	平成26年11月30日～平成28年11月29日	アメリカ(フロリダ)	スタンフォード大学	アメリカにおける体操競技の実態と強化について研修
202	出島 茂幸	26年長期	スケート(スピードスケート)	平成26年9月12日～平成28年9月11日	アメリカ(ソルトレークシティ)	ユタオリンピックオーバル	アメリカナショナルチームにてコーチング研修、育成システム、医科学サポートの活用方法、マネジメントについて学ぶ
203	谷川 聡	26年短期	陸上(ハードル)	平成26年7月30日～平成27年7月29日	アメリカ(フロリダ)	University of Central Florida ほか	アメリカにおけるトレーニング理論、トレーニングシステム、コーチング論を学ぶ
204	山尾 光則	26年短期	サッカー	平成26年9月10日～平成27年9月9日	ドイツ(ライムスバッハ)	IFC, Reimsbach	グラスルーツ・育成年代・トップチームのトレーニング研修、ゲーム分析、ゲーム環境等の調査等
205	坂尾 美徳	26年短期	サッカー	平成26年5月10日～平成27年5月9日	ドイツ(デュイスブルグ)	MSV デュイスブルグ	ドイツプロクラブの育成カテゴリーのプランニング・トレーニングの構築およびコーチング、プロクラブの普及・育成・強システムについて研修
206	土橋 登志久	26年短期	テニス	平成26年10月31日～平成27年10月30日	フランス(パリ)	フランステニス連盟 ほか	フランスのプロ・ジュニア選手の育成・強化システム、トレーニング方法、メンタルアプローチ、大会でのコーチング等ほか、国による強化・組織の運営システムを学ぶ
207	大島 杏子	26年短期	体操(体操競技)	平成26年10月12日～平成27年10月11日	アメリカ(サクラメント)	Elevate Gymnastics Academy	アメリカ体操界のジュニア選手育成システム及びその指導方法、跳馬の技術指導方法について学ぶ
208	長良 将司	26年短期	フェンシング(サーブル)	平成26年7月27日～平成27年7月26日	アメリカ(ポートランド)	Oregon Fencing Alliance	世界トップのナショナルチームの技術指導及びマネジメントを学ぶ
209	三木 二郎	27年長期	水泳(競泳)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	イギリス(ロンドン)	イギリス水泳連盟	イギリス水泳連盟の運営システム、強化システム・指導プログラムを学びながら、ヨーロッパ諸外国コーチとのネットワークを構築する
210	岩淵 聡	27年長期	テニス	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	イギリス(ロンドン)	イギリステニス協会(LTA)	LTAがロンドンオリンピックにおける自国選手のメダル獲得(男子シングルス)を成し遂げた強化策を学ぶ
211	白井 祐介	27年長期	ボート	平成27年8月27日～平成29年8月26日	デンマーク(コペンハーゲン)	コペンハーゲン大学	世界トップレベル選手のトレーニング方法、コーチングおよびサポートの実態や、医科学データの活用方法を学ぶ
212	遠藤 由華	27年長期	体操(新体操)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	アメリカ(シカゴ)	North Shore Rhythmics	アメリカ在住のロシア人コーチのもとで技術・トレーニング方法、コーチング方法を研修し、またアメリカの段階別・レベル別選手育成システムとその構築された背景を研究について学ぶ
213	森 勉人	27年長期	体操(体操競技)	平成27年7月10日～平成29年7月9日	イギリス(バジルトン)	South Essex Gymnastics Club	イギリスにおけるジュニア～シニアへの一貫教育システムおよびナショナルチームでの指導方法を学ぶ
214	米満 達弘	27年長期	レスリング(フリースタイル)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	アメリカ(ペンシルバニア)	ペンシルバニア大学	世界に勝ち抜くためのフリースタイルの専門技術及び戦略・戦術を修得し、強豪国の強化対策等の研修並びに世界のトップクラス選手情報を収集・分析する
215	舎利弗 学	27年長期	ハンドボール	平成27年8月31日～平成29年8月30日	ドイツ(ベルリン)	Fuchsb. Berlin	欧州のプログラムや男子ドイツ代表チーム各年代のコーチングやスカウティング方法を学び、また海外遠征、合宿時に活かせるネットワークの構築をはかる
216	岩水 嘉孝	27年短期	陸上競技	平成28年12月20日～平成29年12月19日	オーストラリア(メルボルン)	メルボルントラッククラブ	メルボルントラッククラブにおける中長距離とマラソンの実践的トレーニングと指導内容を学ぶ
217	八瀬 統一	27年短期	サッカー	平成27年9月6日～平成28年9月5日	アメリカ(サンノゼ)	San Jose State University	フィジカルトレーニングの実地研修およびアスレティックトレーニング指導論の研修を行う
218	安食 真治	27年短期	スキー(アルペン)	平成27年6月12日～平成28年6月11日	オーストリア(インスブルック)	オーストリアスキー連盟	オーストリアにおけるスキー競技のコーチングシステムと強化環境の調査及びコーチングスキルを学ぶ
219	荻野 正二	27年短期	バレーボール	平成27年8月29日～平成28年8月28日	ブラジル(サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ)	ブラジルバレーボール協会	指導法や世界トップチームの強化方法を学ぶ
220	進藤 隆	27年短期	バイアスロン	平成27年7月27日～平成28年7月26日	ノルウェー(リレハンメル)	ノルウェーバイアスロン連盟	バイアスロン射撃術、クロスカントリースキー技術、トレーニング法およびその指導要領を学ぶ
221	大久保 茂和	28年短期	バレーボール	平成28年9月15日～平成29年9月14日	アメリカ(カリフォルニア)	アメリカバレーボール協会	アメリカにおけるバレーボールの最新コーチング及びトレーニングプログラムを学ぶとともに、アンダーカテゴリーにおけるアスリート発掘・育成プログラムを視察する
222	小川 秀樹	29年短期	サッカー	平成29年6月19日～平成30年6月18日	ドイツ(インゴシュタット)	FC Ingolstadt04	ドイツ・ブンデスリーガのクラブにおけるチーム強化及び選手育成、地域におけるクラブのあり方を学ぶ
223	久保 貴寛	29年短期	スキー	平成29年5月14日～平成30年5月13日	フィンランド(ヴォッカティ)	Vuokatin Urheilupuisto	フィンランドの強化拠点となっているヴォッカティを中心に夏季及び冬季におけるジャンプトレーニング、クロスカントリートレーニング、その他トレーニング内容の把握
224	桑原 俊	29年短期	体操(体操競技)	平成29年8月29日～平成30年8月28日	アメリカ(スタンフォード)	Ford Burnham gymnastics gym	スタンフォード大学にて体操競技の指導、他国の指導・技術分析の方法を学び実際に指導を行う。
225	金丸 雄介	29年短期	柔道	平成29年4月5日～平成30年3月31日	イギリス(カーディフ)	Sports Wales National Centre	イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国のトップクラス、及びナショナルチームにおける柔道指導法、強化システムの調査、研究および周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
226	須藤 啓太	30年長期	サッカー	平成30年7月9日～令和2年6月9日	スペイン/バスク	ATHLETIC CLUB	世界トップレベルを走るスペインの育成年代の日常に触れ、スペイン人と日本人の技術、戦術、フィジカル、メンタル面における違いから日本人が海外でプレーする際にアドバンテージとなる部分を見極める。
227	河野 恭介	30年長期	スキー	平成30年7月10日～令和2年12月27日	オーストリア/インスブルック	Arlberg Ski club	アルペンスキーのコーチング理論、育成方法(日本との違い)を海外チームから学ぶ。
228	小原 英志	30年長期	スケート	平成30年8月10日～令和2年8月9日	カナダ/カルガリー	カナダスケート連盟 Canadian Sport Institute Calgary	カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得、カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査、カナダにおけるコーチ養成システムの調査
229	近藤 大生	30年短期	テニス	平成30年11月1日～令和2年10月31日	フランス/パリ	フランステニス連盟	今年のデビスカップで優勝したフランスから、地域や県からトップ選手までの育成システムを学ぶ。
230	山村 宏太	30年短期	バレーボール	平成30年8月20日～令和2年8月19日	イタリア/ラツィオ	Fonteviva Livorno/ Paolo Montagnani	世界スタンダードのバレーボール習得と日本人に合わせたイムペーション、そして日本人におけるブロックシステムの構築とコーチングスキルの向上について
231	古城 梨早	30年短期	体操(新体操)	平成30年8月22日～令和2年8月21日	カナダ/トロント	Jusco Rhythmic Gymnastic Club	カナダのチームで指導しているブルガリア人コーチのもとで、語学の研修と手具の技術やトレーニング等、各年代の指導プログラムを学ぶ。

スポーツ指導者海外研修事業報告書

	氏名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研修内容
232	中川 貴哉	30年短期	テコンドー	平成30年8月24日～ 令和2年8月23日	イギリス/マンチェスター	GB Taekwondo (GaryHall)	ナショナルテコンドーセンターにおける強化活動、運営についての研修、練習映像および試合映像の撮影方法および分析方法、活用方法についての研修
233	松岡 佑起	31年長期	陸上競技	令和2年3月17日～ 令和4年3月16日	イギリス/ロンドン	Saint Mary's University	中長距離種目のトレーニング方法、コーチング論、選手強化体制について学び、日本選手の強化育成に向けた新たなトレーニングプログラム、強化育成システムを構築する基礎とする。
234	塚田 圭裕	31年長期	バレーボール	令和元年8月7日～ 令和3年8月6日	アメリカ/ペンシルベニア	Temple University	世界レベルの選手・チームの強化方法並びにアメリカナショナルチームの視察・大学スポーツ(NCAA)の研究
235	山中 武司	31年長期	アイスホッケー	令和元年6月26日～ 令和3年6月25日	カナダ/オタワ	KANATA Lasers	ジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。アイスホッケーの新しい戦術の習得。
236	松岡 慧	31年長期	フェンシング	令和元年8月20日～ 令和3年8月19日	フランス/パリ	フランスフェンシング協会	フェンシング競技指導に必要な技術並びに技能習得。強豪国の育成並びに強化システムの調査・研究。
237	福井 英郎	31年長期	トライアスロン	令和元年6月28日～ 令和3年9月30日	フランス/オルレアン	フランストライアスロン連盟	2024年パリオリンピックに向けた若手育成・強化方法を学ぶ。種目転向型・専門型などの選手発掘方法を調査する。
238	松原 英輝	31年短期	サッカー	平成31年4月1日～ 令和2年3月17日	フランス/ランブイエ	Toulouse FC 育成センター	フランスにおけるプロクラブの主に10歳から12歳までの育成プログラムを学ぶ。
239	見汐 翔太	2年長期	サッカー		イギリス/バーミンガム	イングランドサッカー協会 (FA)	イングランドサッカー協会 (FA)の強化拠点から、そのフィロソフィーとデータ分析の活用を学ぶ。
240	田知本 遼	2年長期	柔道		イギリス/エジンバラ	Judospace Educational Institute	イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国等の柔道指導方法・育成指導プログラムの調査・研究及び柔道事情を学ぶ。
241	片桐 央視	3年短期	サッカー		ドイツ/フランクフルト	ドイツサッカー連盟	選手へのコーチング方法を中心に、データの活用方法、育成や指導者への関わりなどを学ぶ。
242	湯元 進一	3年長期	レスリング		ロシア/ウラジカフカス	ロシアレスリング協会	ロシア国内の育成年代からトップ選手までのコーチング方法及びトレーニング方法を学ぶ。
243	嘉敷 陽介	3年長期	ハンドボール		デンマーク/オーデンセ	HCオーデンセ	①競技力向上に関する具体的取り組みの調査・研究 ②コーチングの方法論に関する調査および実践

**スポーツ指導者海外研修事業
令和2年度帰国者報告書**

発行日 令和3年3月23日
編集・発行 公益財団法人 日本オリンピック委員会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square13階
TEL03-6910-5957 FAX03-6910-5960

